

# 第1章 整備基本計画の策定にあたって

## 1-1 整備基本計画策定の背景と目的

海津市内は、縄文海進により市内平地部のほとんどはかつて海であった。そのため、古い時代の遺跡は養老山地の麓に集中している。市域における最も古い時代の遺跡は、円満寺山古墳群東の扇状地に所在する2つの貝塚である。弥生時代の遺跡も近年確認され、早くから開けていた地域であったことを物語っている。このような前史を経て古墳時代に入ると、東海地方の古代史を考える上で重要な位置を占める古墳がいくつも確認されている。そのひとつが円満寺山古墳群である。濃尾平野が一望できる養老山地の支脈に立地し、昭和56(1981)年12月16日に南濃町の史跡に指定され、平成17(2005)年の合併海津市発足を機に市の史跡に移行した1号古墳は、古墳時代前期に築造された前方後円墳である。1号古墳の北西約250m付近には、いずれも円墳の2号古墳及び3号古墳があり、円満寺山古墳群はこの3つの古墳から構成される。この他にも市内には、古墳時代前期から後期に築造された古墳が180基以上も確認されている。

円満寺は海津市南濃町庭田に位置し、市内で最も古い奈良時代創建と伝わる寺院の1つである。かつては現在の位置から北西約600m付近にある庭田字庭田北谷の丘陵地にあった。跡地には今なお伽藍の基壇などが遺存している。円満寺後背に上述した養老山地の支脈があり、その山頂部(通称円満寺山)に円満寺山古墳群がある。昭和40(1965)年代に南濃町が貯水槽を設置する際に石槨の一部が確認され、はじめてその存在が知られるようになった。貯水槽設置後に発掘調査が行われ、いわゆる同範鏡論を左右する三角縁神獣鏡を含む副葬品が出土し著名になったが、この時は古墳の全体像の把握までには至らなかった。その後確認された2～3号古墳と合わせて本格的な発掘調査が行われることとなり、その過程で貯水槽も解体撤去された。

平成22(2010)～27(2015)年度までの発掘調査により古墳の全体像が概ね把握できたことを受け、円満寺山古墳群の整備基本計画を策定することとなった。本計画は円満寺山古墳群を適正に保存することを前提とし、古墳を中心とする公園的空間としての整備や周辺資源との連携を充実することで、市民はもとより広く国民の利用に供することを目標とする。

海津市ではまちづくりの将来像を『魅力ある教育・文化のまちづくり』として文化財の調査や保存、活用を推進しているとともに、『地域の特徴を活かした、活力ある産業のまちづくり』として新たな観光資源の発掘と既存観光資源の充実を謳っている。円満寺山古墳群が持つ価値を踏まえると、まちづくりの核のひとつとして成り得るものであり、整備活用は都市像を実現するための方策といえる。

## 1-2 計画の枠組

### (1) 計画の対象範囲

海津市の史跡指定を受けているのは1号古墳だけで、2～3号古墳は未指定である。しかも、宗教法人円満寺の所有地のみ指定したため、1号古墳の指定範囲は後円部に限定され、2～3号古墳の一部を含んでいる。

円満寺山古墳群を適正に保存するとともに、より積極的に活用していくためには、現在の指定範囲にとらわれず円満寺山古墳群(1～3号古墳)及び周辺域を計画範囲とする必要がある。さらに利活用計画等においては周辺関連資源についても取り込むものとする。

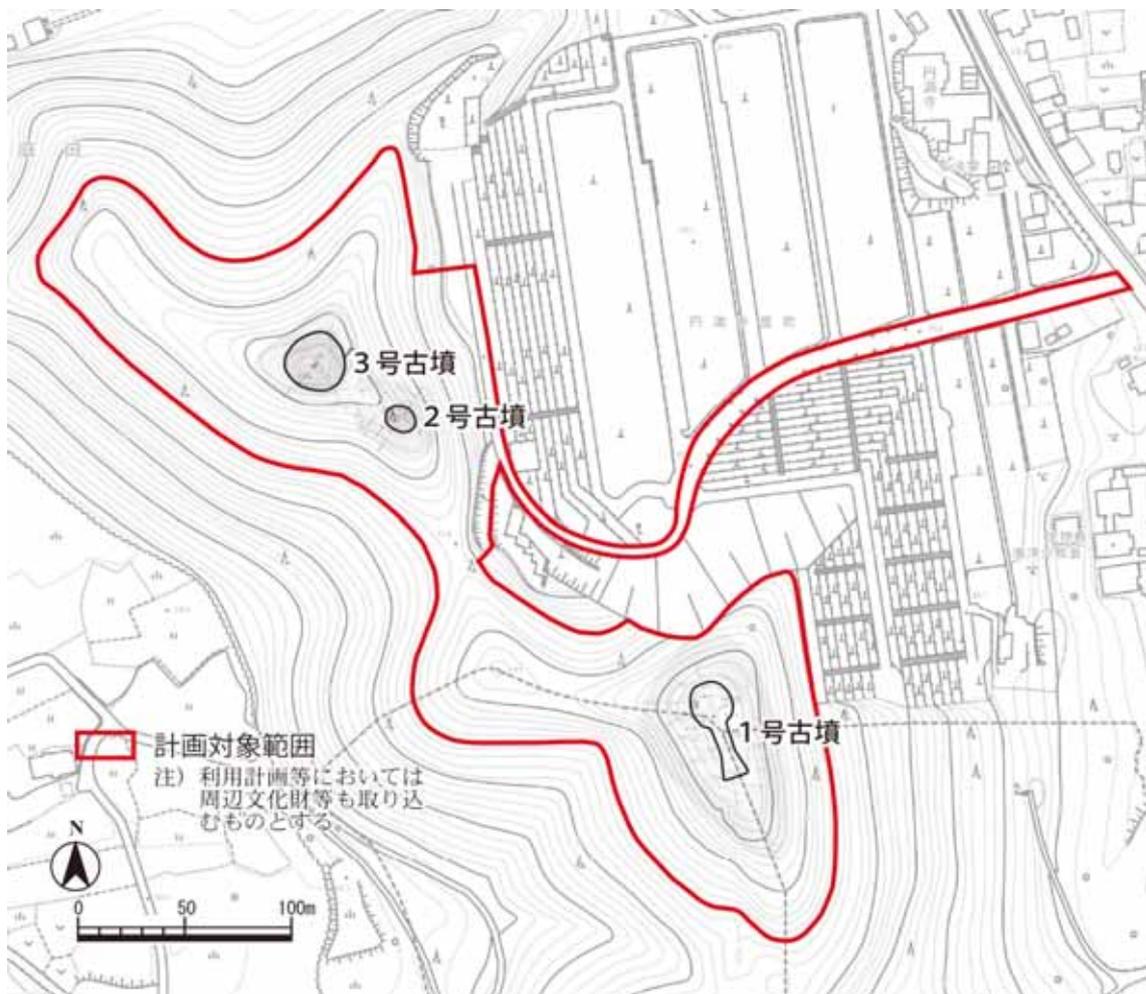


図 1-1 計画対象範囲図

### (2) 計画の改訂

計画内容は平成29(2017)年度を初年度とし、整備に必要な各種調査及び2～3号古墳の史跡指定や1号古墳の上位指定への手続き、土地の公有化、そして整備活用と事業内容が多岐にわたることから、10年を目処に計画内容の改訂を行うものとする。

(3) 保存整備基本計画策定の流れ

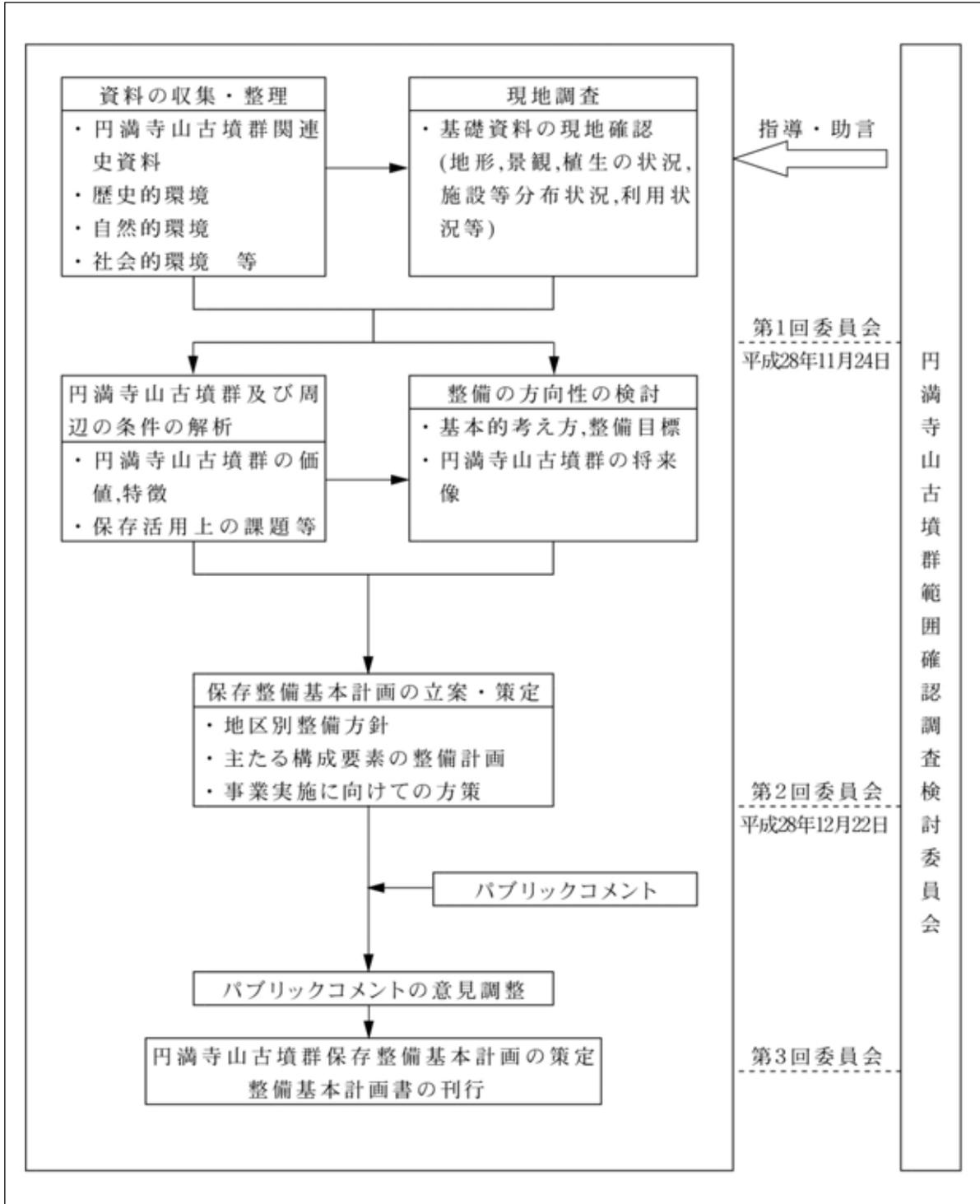


図 1-2 整備基本計画策定の流れ

## 第2章 円満寺山古墳群をとりまく環境

### 2-1 位置とアクセス

円満寺山古墳群のある海津市は、旧海津郡の3町(海津町、南濃町、平田町)が平成17(2005)年に合併して誕生した。岐阜県の最南端に位置し、隣接する自治体は羽島市と養老町、輪之内町、愛知県の愛西市と稲沢市、三重県の桑名市といなべ市である。市域は東西約13km、南北約17kmで、総面積は約112km<sup>2</sup>である。

公共交通としては養老山地の麓を南北に養老鉄道養老線(三重県桑名市から岐阜県揖斐郡揖斐川町を結ぶ)が走っている。また、コミュニティバス・デマンドバスが市役所を中核として各支所や病院、観光地、そしてJR東海道新幹線の岐阜羽島駅を結んでいる。

円満寺山古墳群は名古屋市から直線距離で約25kmの位置にあり、車なら有料道路を利用して約1時間で到達できる。鉄道を利用した場合、近畿日本鉄道で桑名駅を經由し、養老鉄道駒野駅まで約1時間半で到達できる。円満寺山古墳群は駅から徒歩約20分の距離にある。



図 2-1 県市町境界図



図 2-2 アクセス図

## 2-2 歴史的環境

### 縄文時代

現在の岐阜県は海なし県として内陸に位置しているが、縄文時代には、右図に示すようにいわゆる縄文海進によって現在よりも数メートル海面が高く、海津市域を含み北は大垣市の南端辺り、東は名古屋市、知多半島の丘陵近くまでの広い範囲に古伊勢湾の海が広がっていた。海津市域には庭田貝塚、羽沢貝塚があり、貝塚を作った人々の数多くの遺構と遺物が見つかっているほか、戸田遺跡や藪下遺跡、堂島遺跡などでも、縄文時代晩期まで遡れる時期の遺物が散布しており、戸田から庭田や羽沢から上野河戸に広がっていた森林と水辺が人々の生活圏であったことがうかがい知れる。

縄文時代前期に住み始めた人々は、同時代中期に貝塚を作り始めた。その貝層の構成はカキがその大部分を占める。縄文時代中期に羽沢に住み始めた人々は、同時代の晩期に貝塚を作り始めた。その貝層の構成は、ヤマトシジミがその大部分を占める。遠隔地との交流やムラの眼前にある海の産物を利用する生活に適應していったことを示し、両貝塚を構成する貝の対照的な相違は、徐々に進行した海退によって、二つの貝塚周辺の自然環境が変化していったことを如実に物語る。

さらに羽沢貝塚の出土人骨の科学分析結果は、縄文人の食生活の一端を示し、貝層に含まれるように分布する墓域の在り方は、この貝塚が「縄文人の自然崇拜の上に立った祭祀遺構」という性格を有しており、食べ滓を廃棄した場所という従来の評価に再考を促すなど多く貴重な情報を提供する遺跡であり県史跡に指定されている。急峻な山腹と緩傾斜地からなる養老山地と、扇状地は湧水に恵まれており、縄文時代以降、人々の居住域であり生産域となっていく。

### 弥生時代

海津市域では、これまで庭田遺跡と戸田遺跡で弥生時代中期後葉の土器が、羽沢貝塚では弥生時代終末期の土器が微量出土している程度で、確実な遺構は確認されておらず、空白期のような状況であったが、養老山地山麓の扇状地に分布する遺跡の多くが、複数の時代にまたがり、中近世まで継続する複合遺跡であることから、これらの下層に埋没している可能性がある。なお、揖斐川より東の低地部には、安八郡輪之内町の輪之内四郷遺跡が弥生時代終末期にある。

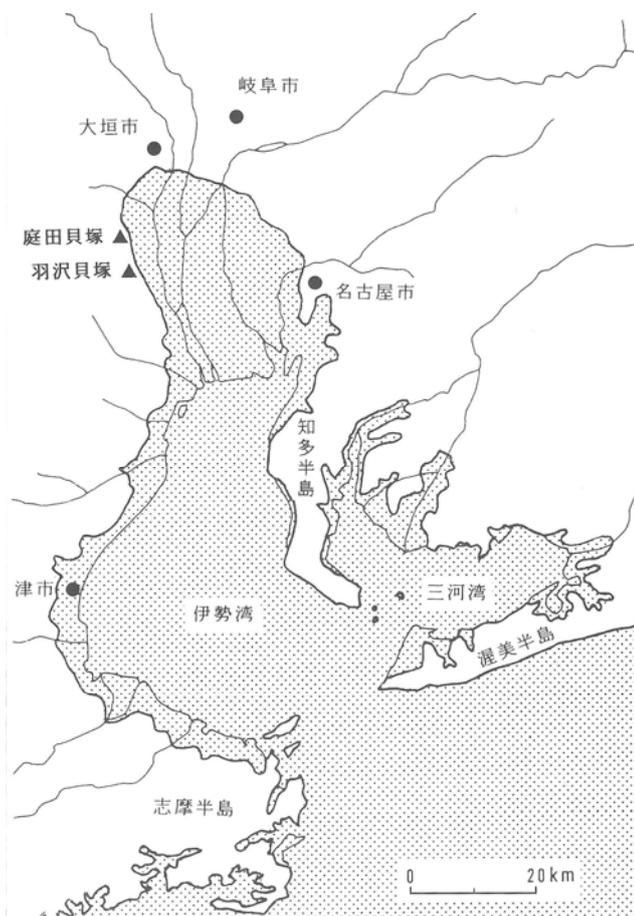


図 2-3 縄文海進最盛期の海岸線図

## 古墳時代

古墳時代の濃尾平野では、木曾三川やその支流は現在よりの細かく枝分かかれし、微高地が点在していたと考えられる。養老山地は平地が少ないため、標高の高い山腹、谷、段丘上に約180基以上の古墳が築かれた。しかし、開墾や盗掘によって消滅したり、著しく改変を被ったものが少なくない。大部分は古墳時代後期のいわゆる群集墳であるが、なかには古代以降の墓の可能性のある小規模墳も存在している。そのような中で、円満寺山古墳群や、その南東に位置する東天神古墳群、行基寺古墳などは、東海地方の古代史を考える上で重要な遺跡である。東天神古墳群より出土した三角縁画文帯五神四獣鏡は、奈良県天理市黒塚古墳出土鏡と同範関係にあり、円満寺山1号古墳の副葬鏡よりも古いものである。また、行基寺古墳も同様に詳細は不明であるが、六神鏡などの小型仿製鏡を3面有するほか、玉類を豊富に副葬する。石釧5点の副葬は、石製腕飾類の副葬量としては県内第2位の数を誇る。これら古墳は、丘陵や段丘上に位置し濃尾平野に所在する諸例と同様に、古い様相を示し、出現期から古墳時代前期末にかけての古墳は丘陵上に築かれ、同時代中期に至って平地に移る。

造出し付円墳(帆立貝形前方後円墳)の可能性のある口庭田船付古墳を除いて、海津市域では円満寺山1号古墳以降には首長墳であっても円墳が主となり、前方後円墳は見られなくなる。同時代後期には、養老山地山腹の標高100m近い高所にまで横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築造された。

これらの古墳の造営基盤となった集落遺跡はまだ判然としていないが、庭田遺跡や志津遺跡で、ごくわずかに遺構や遺物が確認されているほか、最近の戸田遺跡の試掘・確認調査において、円満寺山古墳群よりも古い時期の大型柱穴列や、竪穴建物群が確認されており、今後の調査成果が注目される。なお、平野部の平田町域北東部に位置する岡遺跡や脇田遺跡では古墳時代の遺物が微量出土している。

## 古代から中世

海津市域の大部分は美濃国に属し、8世紀初頭には多芸郡の南部が石津郡として分立された。石津郡の名は、古代豪族石津連に由来する。縄文海進後の海退と相まって、濃尾平野東部の隆起、養老山地東山麓を走る養老断層帯の東一帯の沈降、養老山地の隆起という地盤運動と、木曾三川が運ぶ土砂は、海を南へと後退させていったが、木曾川が流す土砂の量が最も多かったため、東部ほど早く陸地化し、西南部は低いまま最近まで潮の干満の影響がみられた。海津市域はこの西南部に位置し、平田町北東部には微高地が、平田町南部から海津町域、南濃町の津屋川、揖斐川西岸の氾濫原は後背湿地や三角州にあたる。天正14(1586)年以前の木曾川本流は、現在の流路よりも海津町域に深く入り組んで流れていたが、同年に起こった大水害によって、ほぼ現在の川筋に流路が変わった。豊臣秀吉は、

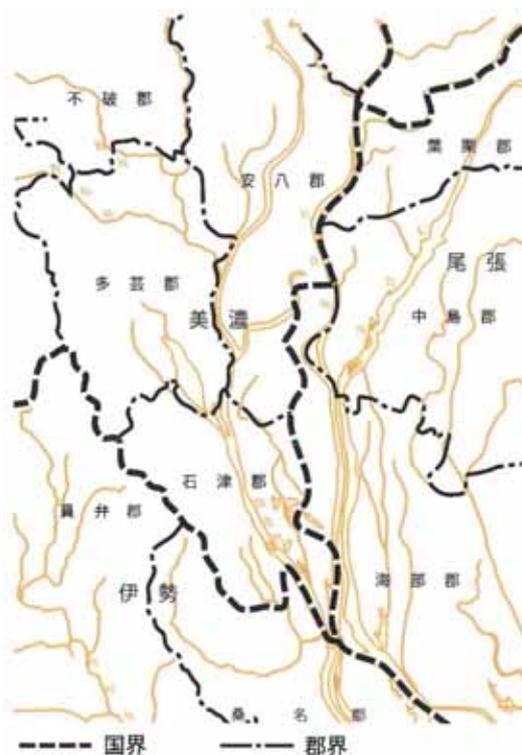


図 2-4 旧国郡名と国郡境界

新たな流路を国境に改め、尾張国に属していた葉栗郡・中島郡・海西郡を美濃国に編入した。

南濃町域の庭田、上野河戸、山崎などで前代から続く遺跡は、いずれも継続して現代まで居住域・生産域となる。古くから上野河戸には石津郡衙が置かれたと考えられており、藪下遺跡と堂島遺跡の掘立柱建物や山崎の大立・南条畑遺跡の竪穴建物、採集された格子目叩きの平瓦は、古代寺院の存在を推定できるし、中世の布堀などの古代か中世まで継続する遺構群は注目される。

低地部では、前述の微高地上が居住域となり生産域(畑地)となった。周囲の後背湿地は生産域(水田)となった。人々は農業や様々な生業に従事した。高須の北に隣接し現大江川に接する土居内遺跡からは、古代から中世にかけての土器や国産陶磁器、貿易陶磁器、転用硯などが採集されており、津の可能性が想定されている。中世後半から形成された村落の多くは現在の小字となって続いている。

南濃町域の北部には、中世後半には多芸七坊と呼ばれる山岳寺院の一つである等内寺があったが戦国時代末期までに衰退した。

## 近世

江戸時代には大垣藩領となった。遺跡としては、天下普請である名古屋城築城にかかる城石垣材が、養老山地の各所で採掘され、それら養老山地採石場跡とその関連遺跡がある。

高須輪中の形成開始時期は、その基本史料である『百輪中旧記』によれば、その記述のとおり中世に遡る説と近世初頭におく説があるが、この史料の成立時期は不明である。輪中は、取水と排水を担う木製樋管の技術向上と合わせて、川の上流側のみ堤防を設ける尻無堤の築堤、満潮時の海水の遡上による塩害を防ぐために下流側にも潮除懸廻堤が築かれるという変遷を辿り形成された。一村毎を囲む小さな輪中から、複数の村々が協力し、堤防を増築しつつ延伸し、北は元和5(1619)年開鑿の大樽川、東を木曾川、西を揖斐川に画された現在の高須輪中へと変遷していくこととなる。

戦国期には、旧高須輪中内は、今尾の中島氏、高木氏、森寺氏、戸倉氏、市橋氏と勢力が変遷し、脇田・松ノ木には吉村氏、高須には津島四家七苗などの各領主が争う緊張状態にあった。江戸時代の高須には、尾張徳川家の支藩松平氏の高須藩がおかれたが、輪中の中は、高須藩領、幕府の直轄領、尾張徳川家領と旗本領などがモザイク状に分布する土地であった。今尾には尾張徳川氏の附家老竹腰が入った。

異常気象や潮の干満に加え、河川上流山間地の木材乱伐などの環境悪化による土砂の河川への流入は、河川の高床化を促した。さらに北東が高く南西が低い地形である高須輪中の堤を越水し浸水する洪水が多発した。また、17世紀から18世紀初頭には、高須輪中の中で新田開発が盛んになったことで、遊水池が激減したことや、北部の高い地域での農業用地下水の組み上げが地盤沈下を誘発したことなどによって、排水が悪化するなどの輪中内開発による悪影響も生じた。木曾三川の統一治水工事の必要を考えた幕府は、大名に命じ問題を解決しようとし、いわゆるお手伝い普請であるが、後に大名に金銭を負担させる形に改められ、幕末までに数次に渡って工事が行われたが、完全にその目的を達することができず、その後も度々洪水被害は発生した。

## 近代・近現代

市内に残る近代化遺産や遺構は、治水・治山に関連するものが多く、地理的な影響を顕著に示している。明治政府は広く河川環境や港湾の工事を行うため、優れた水工事技術を

有するオランダから技師団を招いた。そのうちの1人ヨハネス・デ・レーケは、木曾三川流域の詳しい調査を行った上で改修計画を立て、明治20(1887)年から25年間をかけて三川分流工事や周辺山間部の砂防工事を行った。国登録有形文化財羽根谷砂防堰堤はこのときのものである。これらによって、河川はほぼ現在の川筋となった。近代より現代にかけて継続して行われた治水工事や治山工事、耕地改良工事によって災害の被害はさらに減少し、排水機の稼働・可動堰の設置によって塩害も軽減され、農作物の収穫が飛躍的に増えていくこととなり、輪中の景観は大きく変わっていった。

明治22(1889)年、前年の市町村制が公布による町村制施行、明治30年の郡制施行によって海津郡が設置、その後昭和29(1954)～30(1955)年に南濃町、海津町、平田町が設置され、平成の大合併を迎え、海津市となった。

#### 参考文献

- 南濃町文化財発掘調査報告Ⅰ 庭田貝塚 岐阜県南濃町教育委員会 龍谷大学考古学資料室 1979
- 南濃町文化財発掘調査報告Ⅱ 東天神古墳群6・7・8号墳 岐阜県南濃町教育委員会 龍谷大学考古学資料室 1981
- 南濃町文化財調査報告書第Ⅲ冊 遺跡分布調査報告書 岐阜県南濃町教育委員会 関西大学文学部考古学研究室 1995
- 南濃町文化財調査報告書第4冊 庭田貝塚範囲確認調査報告書 南濃町教育委員会 1996
- 南濃町文化財調査報告書第6冊 羽沢貝塚発掘調査報告書 南濃町教育委員会 2000
- 岐阜県海津市文化財調査報告書第1冊 海津市内遺跡詳細分布調査報告書 岐阜県海津市教育委員会 関西大学文学部考古学研究室 平成24年3月

(2) 指定等文化財

海津市の指定・登録文化財は下表に示す通りである。円満寺山古墳群は1号古墳のみ市史跡の指定となっている。

【国指定文化財】

種別	名称	員数	所在地	所有者・管理者	指定年月日
史跡	油島千本松締切堤	1	海津町油島	国土交通省	昭和15年7月12日
天然記念物	津屋川水系清水池ハリヨ生息地	1	南濃町津屋	海津市および個人	平成24年9月19日

【県指定文化財】

種別	名称	員数	所在地	所有者・管理者	指定年月日
重要文化財	板碑	1	南濃町上野河戸	行基寺	昭和32年7月9日
	一光三尊弥陀仏	1	南濃町上野河戸	行基寺	昭和32年12月19日
	蛇池宝篋印塔	1	平田町蛇池	宝延寺	昭和52年11月18日
重要無形民俗文化財	今尾左義長	—	平田町今尾	今尾左義長保存会	昭和55年1月18日
史跡	高須藩主歴代墓	9	南濃町上野河戸	行基寺	昭和32年7月9日
	石津薩摩工事義歿者墓	13	南濃町太田	円成寺	昭和32年7月9日
	羽沢貝塚	1	南濃町羽沢	海津市	昭和32年7月9日
	庭田貝塚	1	南濃町庭田	海津市	昭和32年7月9日
	春岱今尾窯跡	2	平田町今尾	海津市	昭和51年12月21日
	今尾常栄寺薩摩工事義歿者墓	1	平田町今尾	常栄寺	昭和56年5月19日
天然記念物	松山諏訪神社の大クス	1	南濃町松山	海津市	昭和32年7月9日
	梶屋八幡神社社叢	1	海津町稲山	梶屋八幡神社	昭和58年2月25日
	杉生神社のケヤキ	1	南濃町太田	杉生神社	平成8年7月9日

【市指定文化財】

種別	名称	員数	所在地	所有者・管理者	指定年月日
史跡	円満寺山古墳	1	南濃町庭田	圓満寺	昭和56年12月16日
	駒野城跡	1	南濃町駒野	海津市	昭和31年8月20日
	氏家ト全の墓	1	南濃町安江(碑・塚)	個人	昭和31年8月20日
	東天神古墳	1	南濃町駒野	東天神社	昭和31年8月20日
	行基寺古墳	1	南濃町上野河戸	行基寺	昭和31年10月25日
	志津三郎兼氏住居跡	1	南濃町志津	善教寺	昭和31年10月25日
	今尾渡し道標	1	平田町今尾	今尾区連合自治会	昭和51年6月15日
	津屋城跡	1	南濃町津屋	本慶寺	昭和56年12月16日
	狐平古墳	1	南濃町境	山神社	平成6年2月23日
	七つ墓	1	南濃町志津	個人	平成13年9月5日
	柑橘翁伊藤東太夫碑	1	南濃町太田	杉生神社	平成13年9月5日
	出来山三号墳	1	南濃町吉田	吉田区長	平成15年12月15日
	徳永寿昌墓碑	1	海津町高須	広徳寺	平成17年2月22日
名勝	臥龍山行基寺	—	南濃町上野河戸	行基寺	昭和31年10月25日
天然記念物	志津の養老ナシ	2	南濃町志津	海津市	昭和31年8月20日
	出来山の千本桜	約450本	南濃町吉田	吉田区	昭和34年2月6日
	ハリヨ	—	南濃町全域		昭和56年12月16日
	駒野のイヌマキ	1	南濃町駒野	個人	昭和63年12月9日
	諏訪神社のマキ	1	南濃町松山	諏訪神社	平成2年7月24日
	杉生神社のヒツパタゴ	1	南濃町太田	杉生神社	平成6年2月23日
八幡神社のイチヨウ	1	南濃町山崎	八幡神社	平成6年2月23日	

表 2-1 指定等文化財一覧表(1)

種別	名称	員数	所在地	所有者・管理者	指定年月日	
有形文化財	七重塔	1	南濃町上野河戸	行基寺	昭和31年10月25日	
	西願寺山門	1	平田町今尾	西願寺	昭和54年9月5日	
	早川邸	1	平田町三郷	個人	平成15年10月15日	
	金廻四間門樋	1	海津町萱野	海津市	平成27年4月3日	
	山越弥陀三尊仏	1	南濃町上野河戸	行基寺	昭和31年10月25日	
	木彫観音立像	1	海津町油島	宝暦治水史蹟保存会	昭和30年9月27日	
	木彫観音立像	1	海津町日原	日原自治会	昭和30年9月27日	
	武装半跏像	1	南濃町上野河戸	寒窓寺	昭和31年10月25日	
	釈迦如来立像	1	南濃町上野河戸	寒窓寺	昭和31年10月25日	
	阿弥陀如来(頭部)	1	南濃町上野河戸	寒窓寺	昭和31年10月25日	
	八手観世音菩薩像	1	海津町日原	日原自治会	平成17年2月22日	
	円空仏	1	海津町瀬古	個人	平成17年2月22日	
	釈迦如来坐像	1	南濃町庭田	圓満寺	平成21年4月9日	
	薬師如来坐像	1	南濃町庭田	圓満寺	平成21年4月9日	
	大日如来坐像	1	南濃町庭田	圓満寺	平成21年4月9日	
	十一面観世音菩薩立像	1	南濃町庭田	圓満寺	平成21年4月9日	
	聖観世音菩薩立像	1	南濃町庭田	圓満寺	平成21年4月9日	
	阿弥陀如来坐像	1	南濃町庭田	圓満寺	平成21年4月9日	
	木造天部像	4	南濃町庭田	圓満寺	平成21年4月9日	
	地藏菩薩坐像	1	南濃町庭田	圓満寺	平成21年4月9日	
	古磬	1	南濃町上野河戸	行基寺	昭和31年10月25日	
	時計コレクション	5	南濃町上野河戸	行基寺	昭和31年10月25日	
	四方織部釉小菊印花文大香炉	1	平田町今尾	今尾神社	昭和60年10月26日	
	黄瀬戸釉拍犬	1	平田町今尾	今尾神社	昭和60年10月26日	
	円成寺の大提灯	1	南濃町太田	太田区長	平成15年12月15日	
	高須別院梵鐘	1	海津町高須町	高須別院二恩寺	平成17年2月22日	
	御墨印	1	南濃町上野河戸	寒窓寺	昭和31年10月25日	
	徳永寿昌・昌重連署状	1	海津町萱野	歴史民俗資料館	平成17年2月22日	
	有形民俗文化財	本町軋	1	海津町萱野	海津市	平成4年10月1日
		末広町軋	1	海津町萱野	海津市	平成4年10月1日
山車・恵比須神		1	平田町今尾	本町自治会	平成6年11月16日	
本阿弥新田助命壇		1	海津町本阿弥新田	個人	平成9年12月12日	
無形民俗文化財	高田の甘酒まつり	—	平田町高田	高田自治会	昭和54年9月5日	

#### 【国登録文化財】

種類	名称	員数	所在地	所有者・管理者	登録年月日
建造物	羽根谷砂防堰堤(第1堰堤)	1	南濃町奥条	国土交通省	平成9年9月3日
	羽根谷砂防堰堤	1	南濃町奥条	国土交通省	平成10年1月16日
	伊藤家住宅 主屋	1	南濃町吉田	個人	平成20年3月7日
	伊藤家住宅 収蔵庫	1	南濃町吉田	個人	平成20年3月7日

表 2-2 指定等文化財一覧表(2)

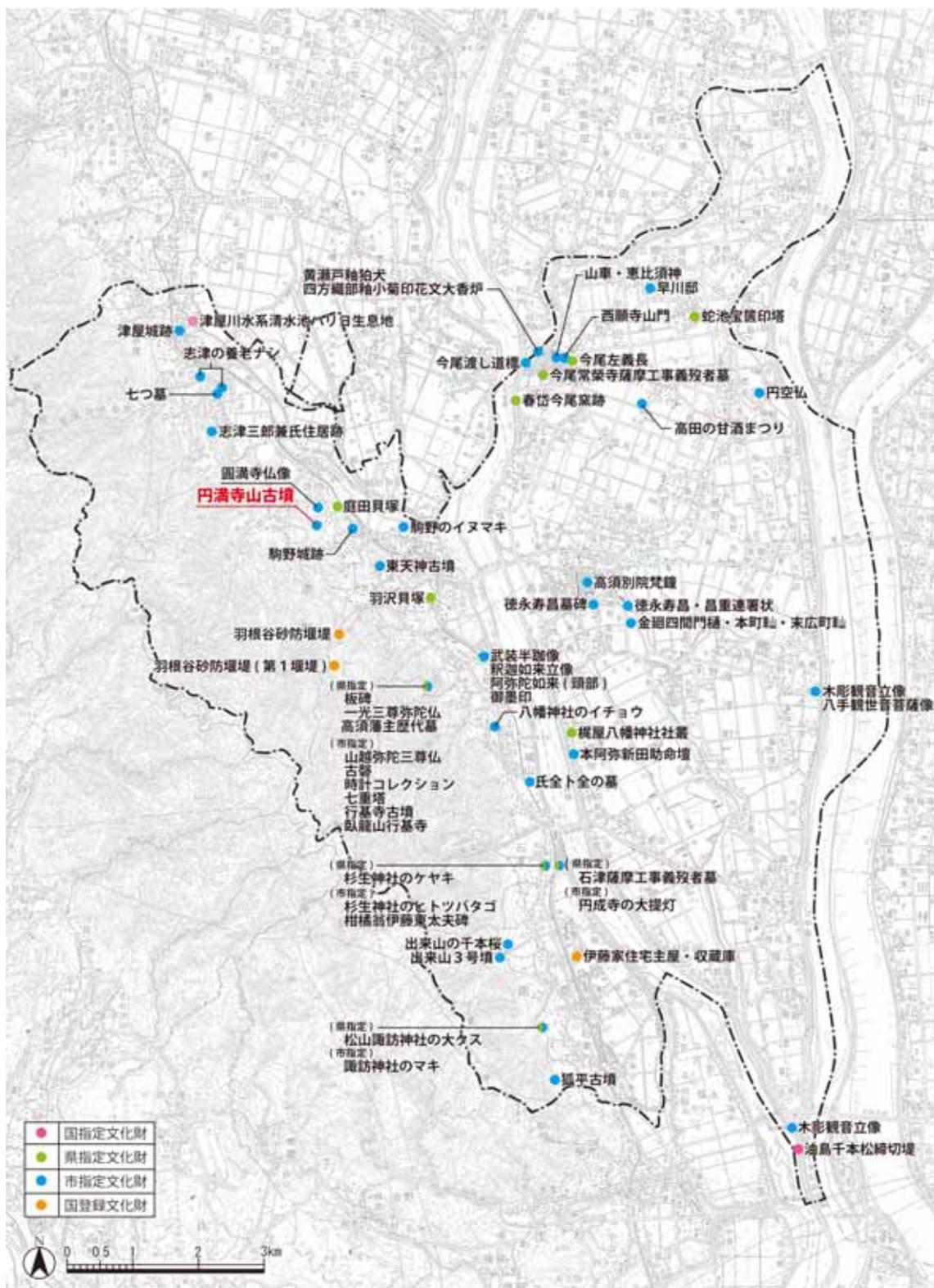


図 2-5 指定等文化財分布図

## 2-3 自然的環境

### (1) 気候

海津市は海に面していないものの、県の最南端に位置することから太平洋側気候に属している。夏は太平洋からの暖かく湿った季節風の影響で高温多湿となり、冬は伊吹おろしと呼ばれる北西風の影響を受けて乾燥する。海津市における10年間の平均気温は15.5℃、8月の平均気温が27.6℃に対して1月の平均気温は4.2℃、年間降水量の平均は1,906.7mmである。

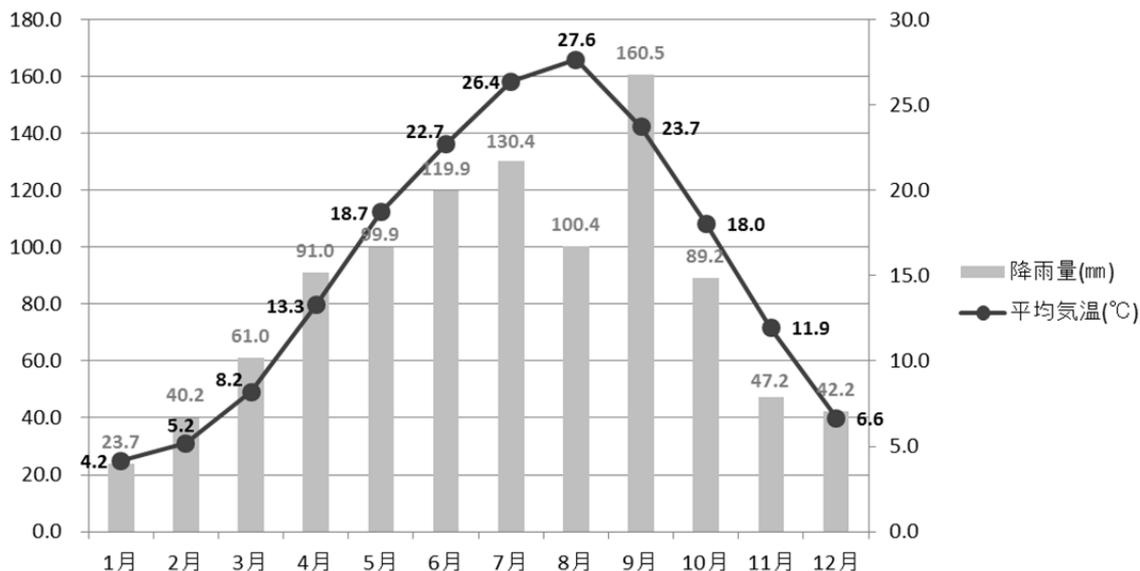


図2-6 平成18(2006)～27(2015)年における月毎の平均降雨量及び平均気温

### (2) 地勢(地形・地質)

海津市は濃尾平野の西方に位置し、市内の地形は西側三重県沿いの山地部と、その東側に広がる平地部で構成される。

西側は県境に沿って標高500～800mの小高い山々が連なる養老山地がある。山地の石質は砂岩と泥岩の互層からなりチャート(珪岩)や石灰岩をともなう。円満寺山古墳群及び周辺域でも表層にチャートがみられる。砂岩には色調や質感から『青石』と呼ばれるものや、軟質で白から白桃色を呈する『イモ石』があり、古くから礎石や石塔、城の石垣などに多用され、現在でも建築材や庭園石材として利用されている。養老山地は養老-伊勢湾断層による逆断層活動によって形成され、断層を境に西の養老山地側は隆起し、東の濃尾平野側は沈降を続けている。これにより山塊全体が西側に傾くことで西側は緩傾斜地形となり、東端は逆に急傾斜の断層崖となっている。断層崖の地形的特徴として複合扇状地の発達が見られる。市域では中部の徳田谷や羽根谷、河戸谷などで広い扇状地が形成されている。これらの比較的傾斜が緩やかな扇状地に遺跡が形成されてきた。

養老山地の西側には濃尾平野の沖積低地が広がり、市内を木曾川及び長良川、揖斐川の三大河川が流れる。先にも述べたように養老-伊勢湾断層の逆断層活動により濃尾平野側が沈降を続けているため、市内の4割ほどが海拔0m以下で断層を境に対照的な地形となっている。海津市で三大河川が収束するのは、濃尾平野で最も低い地域であるためである。

縄文海進後の海退にともなって、木曾川水系の河川は濃尾平野に大量の土砂を運び、広く平坦な沖積平野が形成された。このような地形では、河川が蛇行しやすく、あちこちに微高地(自然堤防)が出現する。人々はこの微高地を居住域とし輪中の形成へとつながる。

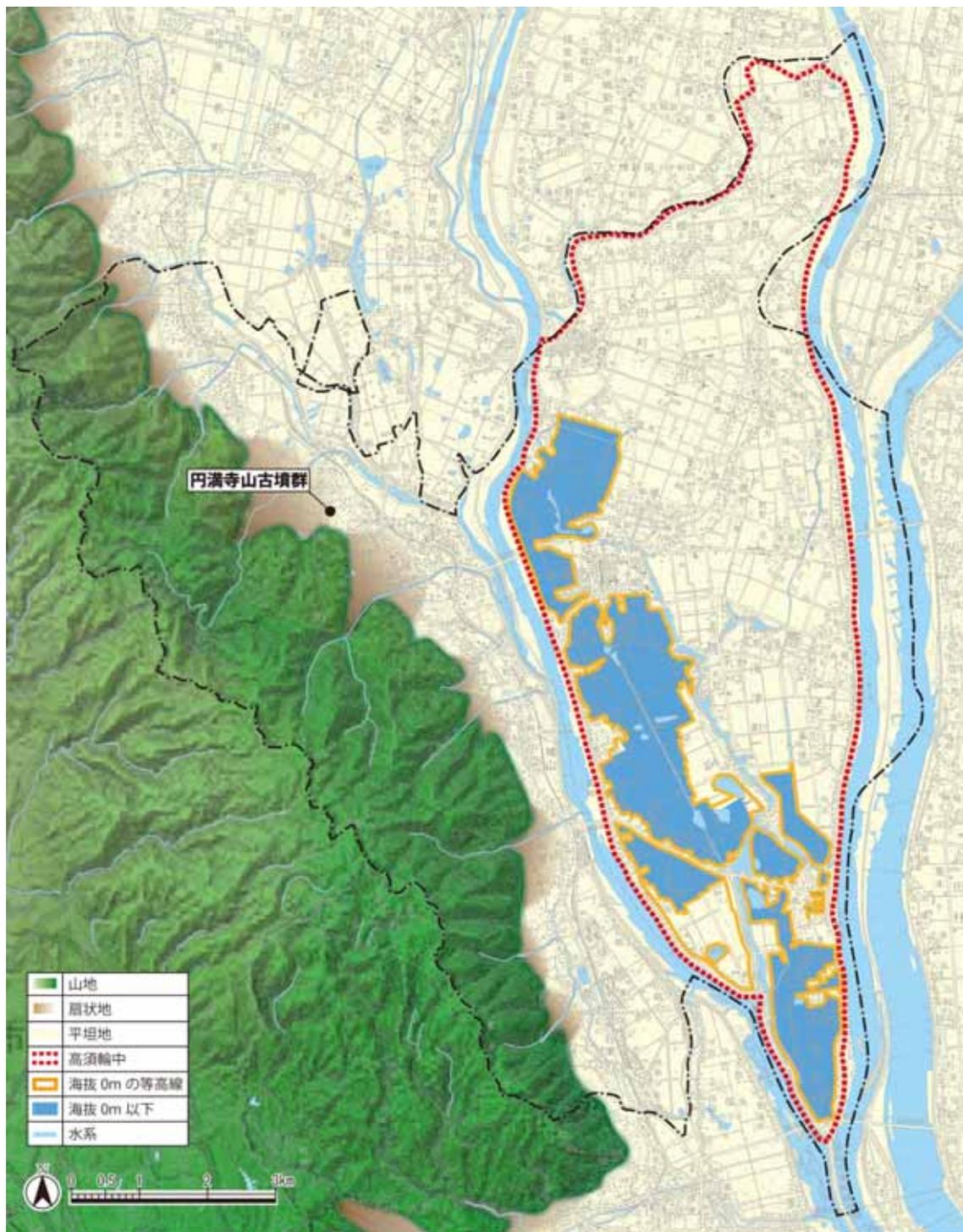


図 2-7 地形図

参考資料 海津市立西江小学校ホームページ『輪中の暮らし』

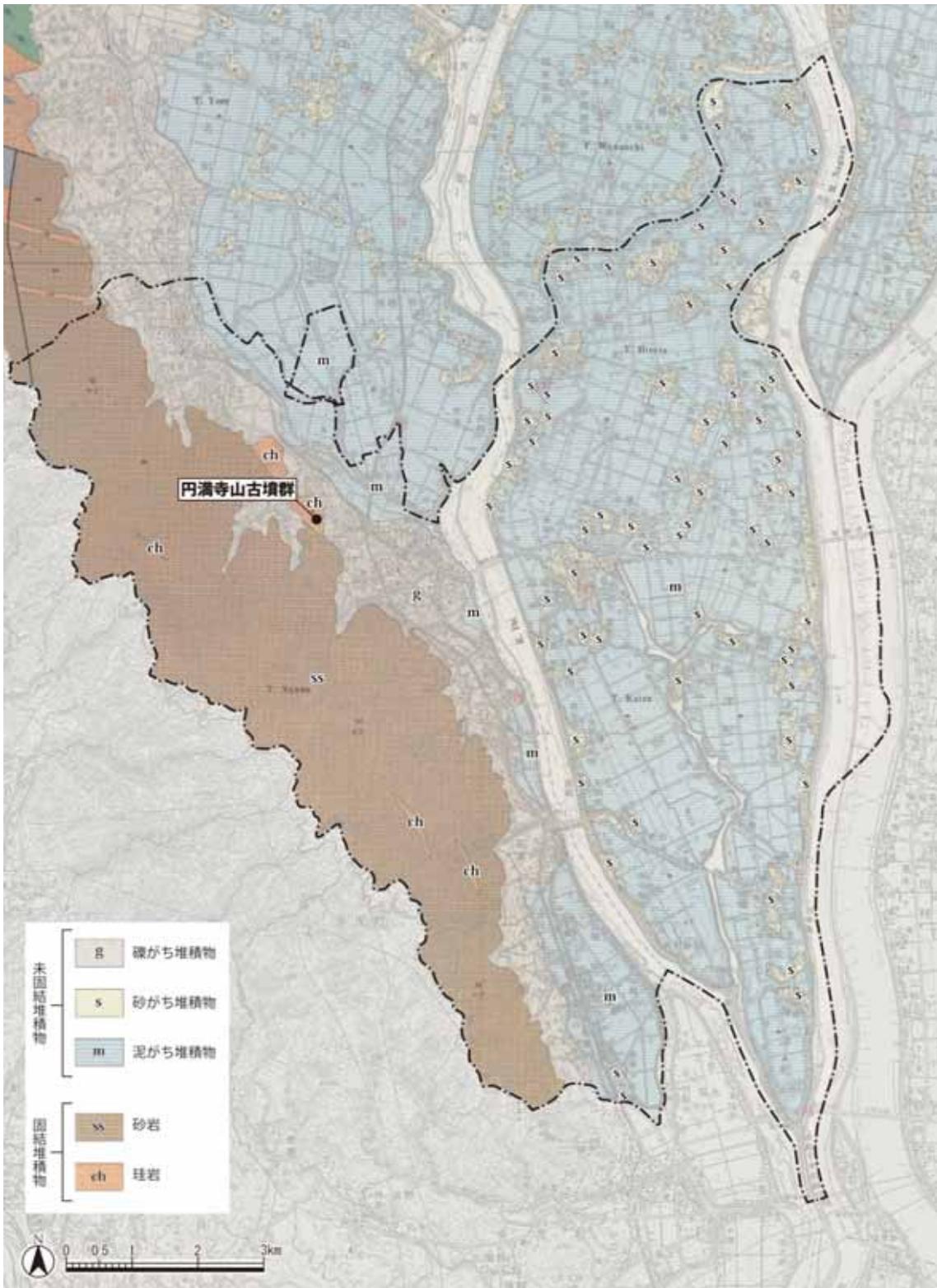


図 2-8 表層地質図

出典 国土交通省国土情報課 5 万分の 1 土地分類基本調査(津島)より一部加筆

### (3) 植生

海津市の植生は、平地部で水田が大半を占め、その中に市街地及び住宅地が点在する。また、木曾川及び長良川、揖斐川沿いでは牧草地等が続いている。山地部はアカマツ群落の他にアカシデーヌシデ群落やスギ、ヒノキ、サワラといった植林が分布する。山地東側の扇状地では、水はけの良い土を利用して果樹園(蜜柑園や柿園)が広がっている。

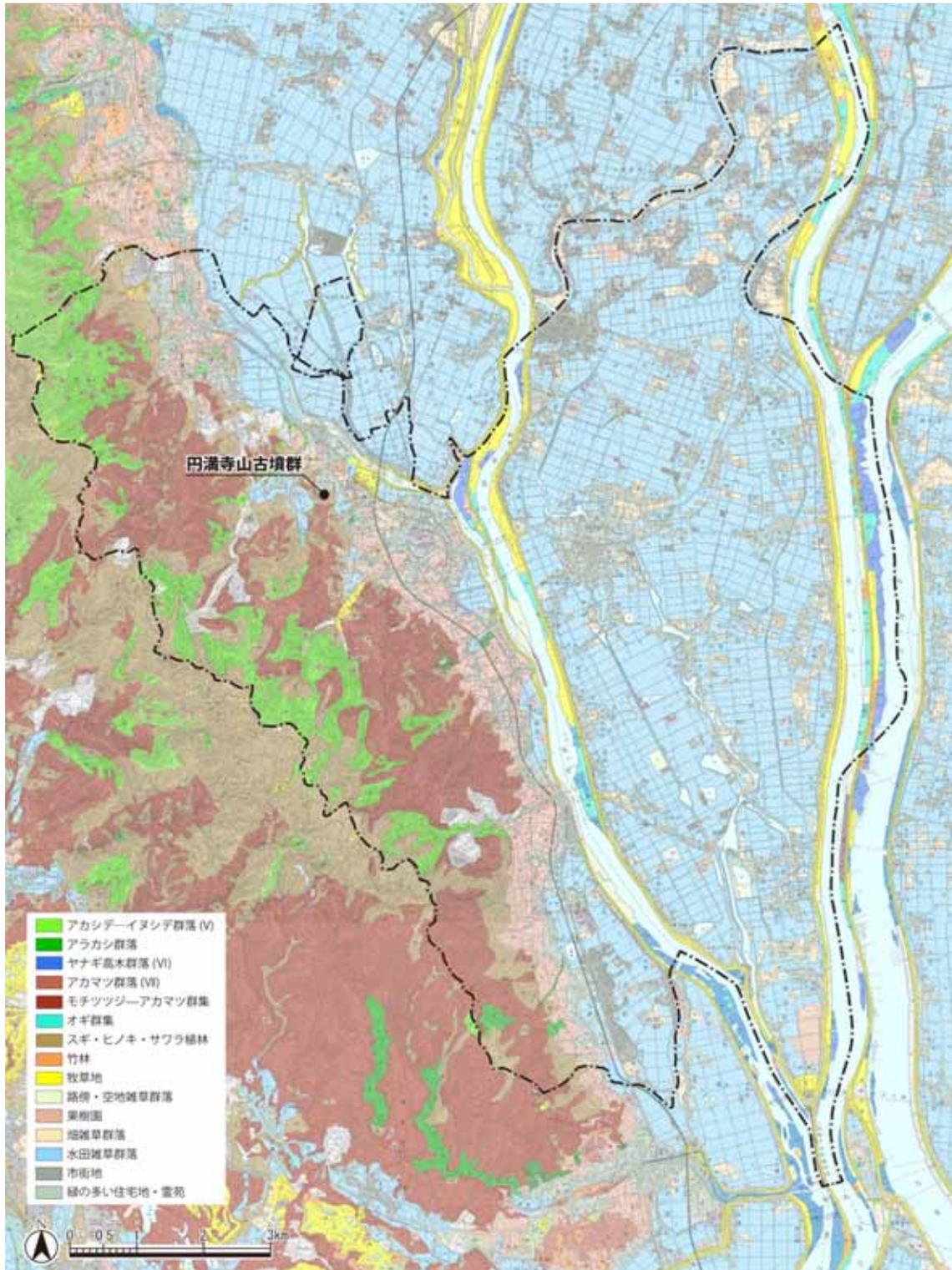


図 2-9 植生図

出典 環境省自然環境局生物多様性センター(養老・竹鼻・駒野・津島・阿下喜・弥富)より一部加筆

## 2-4 社会的環境

### (1) 人口・世帯数

平成28(2016)年4月1日時点での海津市の人口は36,089人、12,146世帯である。近年の推移をみると、平成7(1995)年の41,694人をピークに減少傾向にある。世帯数はわずかに増加しているものの、一世帯当たりの人数は平成7年の3.94人から2.97人とほぼ1人減少し、急速に核家族化が進んでいる。

市内には県立高等学校が1校、特別支援学校が1校、市立中学校が3校、市立小学校が10校ある。近年、人口減と少子化による影響で5つあった中学校は統合により現在の数となった。平成22(2010)～28(2016)年の6年間における人口減少率が7.8%に対して、児童及び生徒数の減少率は15.8%と倍近くになる。

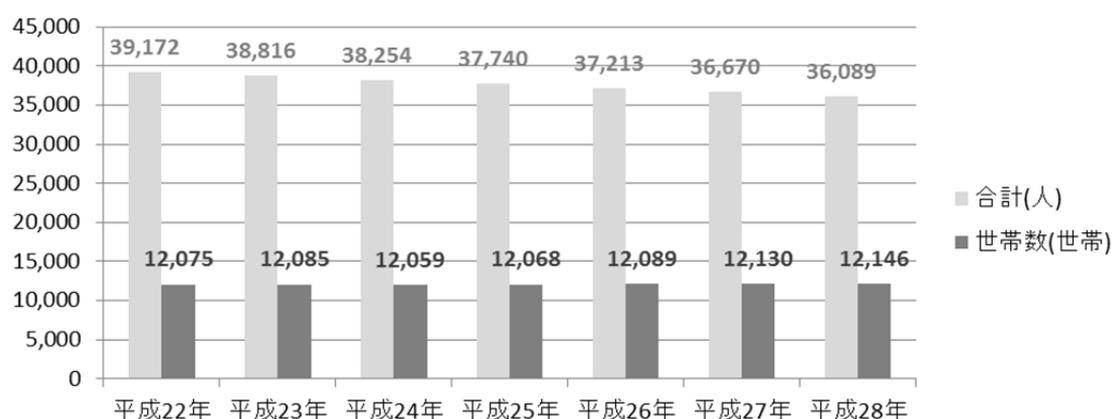


図2-10 人口・世帯数

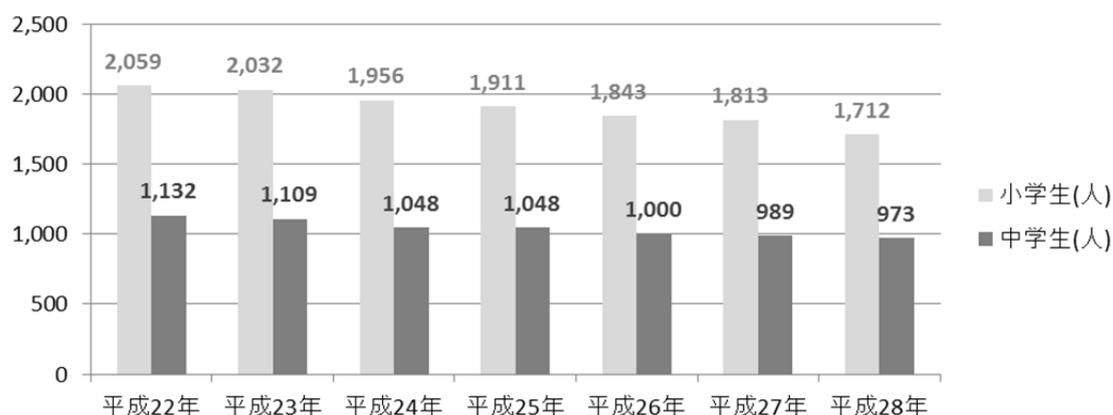


図2-11 児童・生徒数

## (2) 産業

海津市は肥沃な土壌を利用して、かつては稲作と果樹生産が盛んであった。しかし、担い手の高齢化や後継者不足、輸入農産物の増加等の影響により第一次産業の就業者が大幅に減少している。昭和55(1980)～平成2(1990)年までの10年間で就業者が3割以上も減少し、以後の20年間でも同様の割合で減少したため、就業者の数が30年間で3分の1となっている。

第2次産業の就業者数も経済不況や国内企業の海外移転、中国などからの安い商品の流入等により減少が続いている。

第3次産業就業者数は、産業のソフト化・サービス化などによって構成比は増加傾向にあるものの、就業者自体が減少している。この30年間において産業構造が大きく変化していると同時に、就業者数が人口数と同じく平成7年をピークに減少している。

		昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年
就業者数		19,253	19,705	20,748	21,725	21,702	21,096	19,708
内 訳	第1次産業	4,184	3,393	2,686	2,287	2,073	1,859	1,413
	構成比	21.7%	17.2%	12.9%	10.5%	9.6%	8.8%	7.2%
	第2次産業	7,775	8,640	9,424	9,579	9,082	8,142	6,995
	構成比	40.4%	43.8%	45.4%	44.1%	41.8%	38.6%	35.5%
	第3次産業	7,288	7,666	8,635	9,841	10,512	11,007	10,577
	構成比	37.9%	38.9%	41.6%	45.3%	48.4%	52.2%	53.7%
	その他の産業	6	6	3	18	35	88	723

表 2-3 就業者数

(資料: 国勢調査)

## (3) 土地利用

海津市の地目別面積比をみると平地部の大半は田畑及び濃尾三大河川が占める。これに養老山地を合わせると市域の大半を占めている。近年は大規模な宅地開発や市街化が進んでいないことから、土地利用はほとんど変化していない。

(単位: m<sup>2</sup>)

区分	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
田	32,600,020	32,537,626	32,508,156	32,485,080	32,444,994	32,412,708	32,403,743	32,355,914
畑	7,921,604	7,778,980	7,782,184	7,786,650	7,791,934	7,781,466	7,779,405	7,757,121
池沼	1,209,040	1,208,954	1,208,954	1,208,954	1,154,469	1,077,822	1,037,265	1,014,288
宅地	9,850,602	10,067,314	10,084,785	10,106,773	10,133,391	10,153,290	10,127,750	10,147,739
原野	508,408	505,000	504,218	521,880	521,880	516,704	516,628	515,862
山林	11,928,903	11,855,583	11,856,513	11,850,113	11,850,557	11,718,439	11,779,056	11,775,514
雑 種 地	鉄道 用地	196,227	196,227	196,227	196,211	196,211	196,211	196,211
	その他の 雑種地	886,345	951,519	965,184	946,394	1,004,149	1,009,082	1,131,118
その他	47,208,851	47,208,797	47,203,779	47,207,945	47,212,415	47,444,278	47,338,824	47,339,325
合計	112,310,000	112,310,000	112,310,000	112,310,000	112,310,000	112,310,000	112,310,000	112,310,000

表 2-4 地目別面積比

(資料: 土地に関する概要調査)

#### (4) 交通

国道258号が養老山地と揖斐川の間を南北に通過し、同じく平地部を県道1号及び23号、218号、220号が通過する。これらの道路に対して県道8号や117号、119号が東西に通っている。

鉄道は、養老鉄道養老線が養老山地に沿って南北に通る。市内には美濃津屋駅及び駒野駅、美濃山崎駅、石津駅、美濃松山駅の5つがある。

なお、円満寺山古墳群の最寄り駅は駒野駅となり、同駅から徒歩約20分の距離にある。

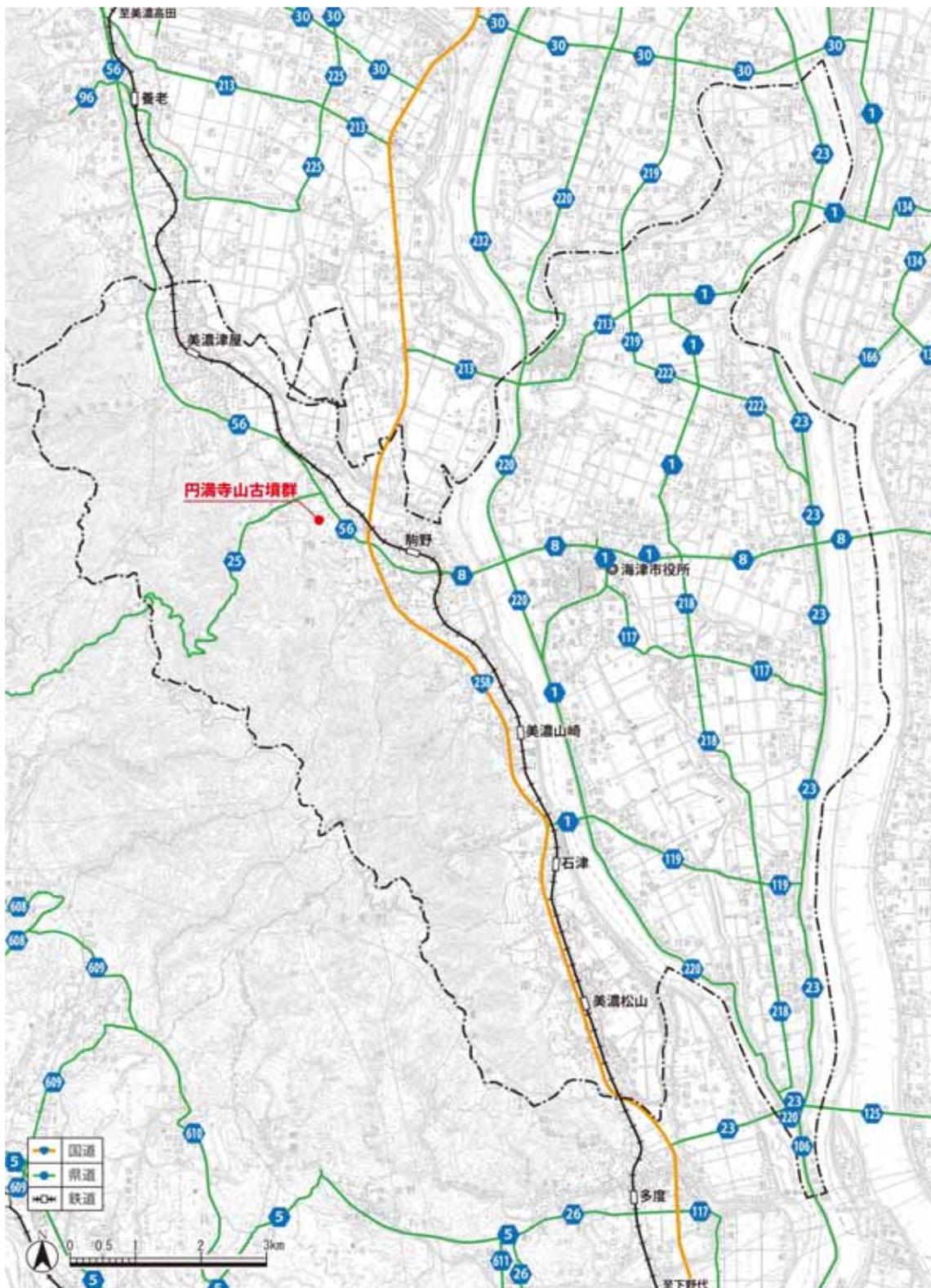


図 2-12 交通

(5) 観光・レクリエーション

養老山地の麓を中心に神社仏閣や遺跡、近代土木遺産が点在する。また、木曾川及び長良川沿いには、国営木曾三川公園の内3つの拠点があるほか、海津温泉や千代保稲荷神社、クレール平田等の観光資源に恵まれ、年間500万人前後の観光客が海津市を訪れている。

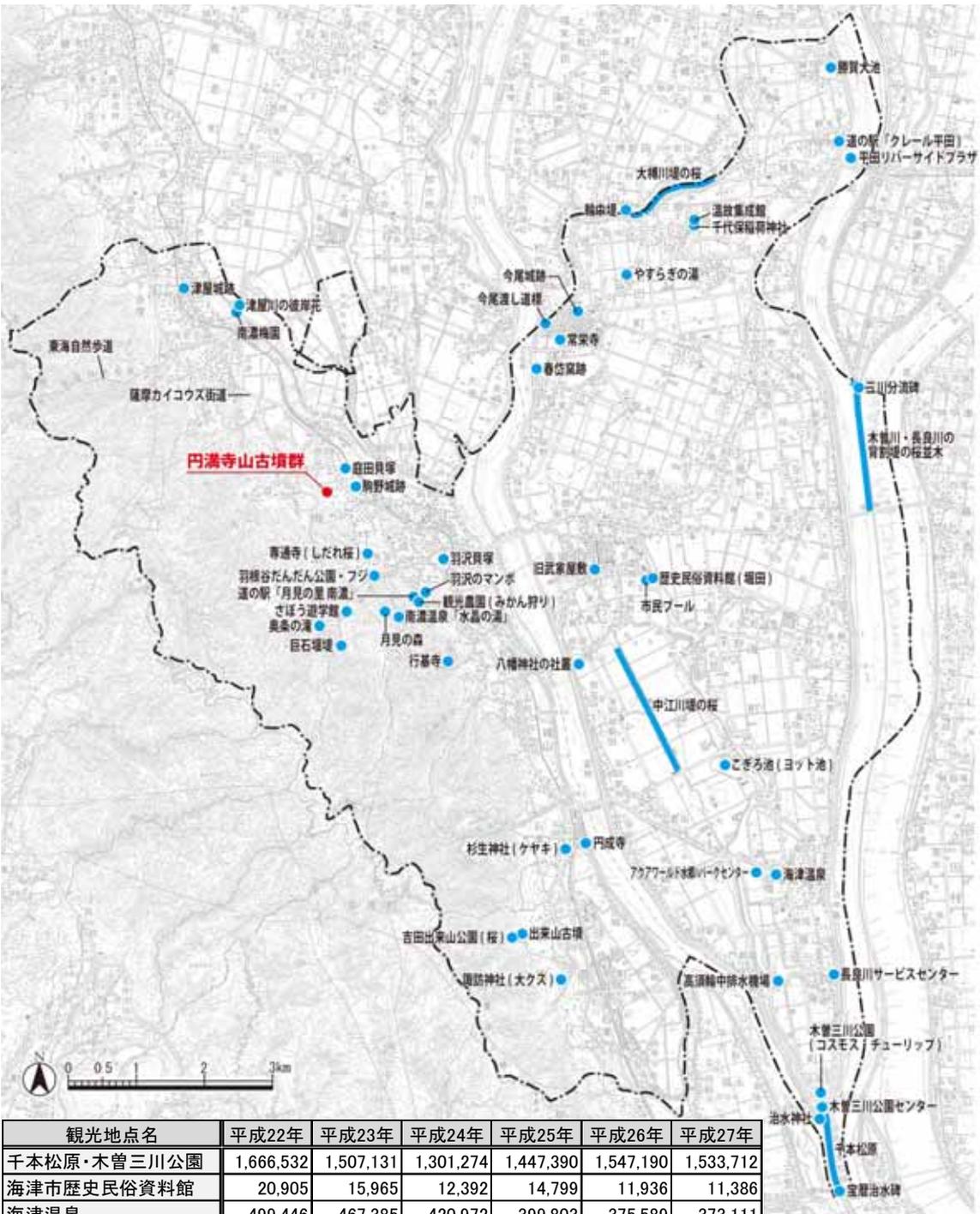


図 2-13 観光・レクリエーション施設等分布図

観光地点名	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
千本松原・木曾三川公園	1,666,532	1,507,131	1,301,274	1,447,390	1,547,190	1,533,712
海津市歴史民俗資料館	20,905	15,965	12,392	14,799	11,936	11,386
海津温泉	499,446	467,385	420,972	399,803	375,589	373,111
チューリップ祭	383,860	342,770	157,767	192,958	216,476	143,160
長良川国際トライアスロン大会	5,000	5,000	5,000	3,850	4,000	5,000
千代保稲荷神社	2,024,040	1,978,035	1,944,482	1,893,819	1,755,008	1,628,892
クレール平田	614,855	604,224	589,734	576,213	534,517	496,908
今尾の左義長	7,000	7,000	9,000	9,000	9,000	9,000
さぼう遊学館	12,848	12,186	11,553	10,560	9,925	7,635
月見の森	13,179	14,009	17,265	16,180	14,634	13,136
水晶の湯	160,655	155,045	121,794	136,637	139,354	140,060
月見の里南濃	552,218	519,824	519,586	531,496	513,536	522,431
海津市産業感謝祭	台風により中止	5,000	8,000	台風により中止	10,000	22,500
合計	5,960,538	5,633,574	5,118,819	5,232,705	5,141,165	4,906,931

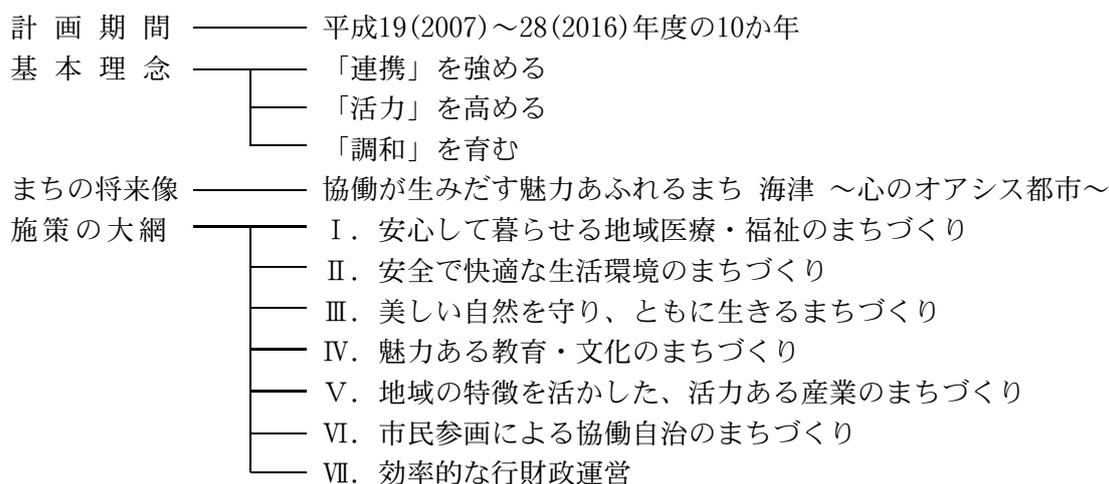
表 2-5 観光入込客数

(資料:岐阜県観光入込客統計調査)

## 2-5 上位・関連計画

### (1) 海津市総合開発計画

平成18(2006)年度に策定された海津市総合開発計画は、海津市発展のために各種具体的計画のすべての基本となる。



この中で円満寺山古墳群に関連する施策の方向とその計画をまとめる。

#### <IV. 魅力ある教育・文化のまちづくり>

##### ○文化財の調査・保全・活用の推進

- ・文化財や伝統芸能の資料収集及び調査研究を図りながら、愛護思想の普及、後継者の育成・支援を図り次世代への継承を促進する。
- ・地域の歴史的教育資源を活用した教育プログラムを作成し、子どもたちの郷土学習機会を強化する。

##### ○歴史民俗資料館の活性化

- ・郷土の歴史や民俗資料を収集・整理・保存し、貴重な文化財を次世代に継承するとともに、公開展示方法を工夫し、来館者の増加を図る。
- ・文化財を活用した市民への教育普及事業の充実を図る。

#### <V. 地域の特徴を活かした、活力ある産業のまちづくり>

##### ○新たな観光資源の発掘と既存観光資源の充実

- ・市観光協会と連携して既存観光施設等の充実を図るとともに、見て学び楽しめる地域の歴史・文化の掘り起こしなどによる新たな観光資源の発掘・整備及び全国に情報発信ができる特産品の開発に向け調査・研究を進める。

##### ○観光PR活動等推進体制の充実と広域観光地との連携強化

- ・市観光協会への支援を行うとともに、見やすく話題性のある観光ガイド・パンフレット作成、地元新聞の地域版やラジオ・テレビ局への地元からの話題性の高い情報

提供、市民・職員による情報技術の活用など各種メディアを有効に活用することにより、宣伝・情報発信を強化する。

- ・市内観光施設間のネットワーク化を図るため、レンタルサイクルやコミュニティバス等を活用して、休日・祝日における入込客数の多い観光施設と市内の観光施設とのネットワーク化を図るとともに、新たな観光コースの構築を検討する。

## (2) 「清流の国ぎふ」づくり計画

平成25(2013)年度に策定された「清流の国ぎふ」は、海津市を魅力あるまちづくりに推進するための計画である。

計 画 期 間	————	平成26(2014)～28(2016)年度の3か年
基 本 理 念	————	水に抱かれた元気で活力あるまち海津
基 本 目 標	┌————	海津らしい“元気なまち”
	├————	海津ならではの“活力あるまち”
	└————	「清流の国ぎふ」づくりのための体制づくり

この中で円満寺山古墳群に関連する施策の方向とその計画をまとめる。

### <海津ならではの“活力あるまち”>

清流に関連する既存の祭りやイベント、観光施設等の魅力向上を図るとともに、地域の自然・歴史・文化・特色ある農業等の観光資源をリンクさせ、新たな観光拠点の形成・イベント開催、特産品の開発等を図る。

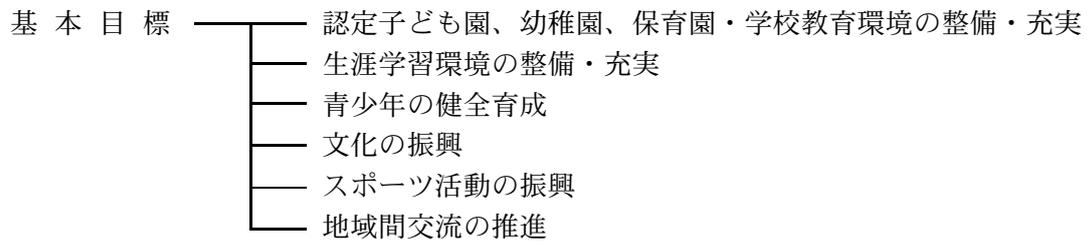
#### ○新たな観光資源の発掘と既存観光施設の活用・再整備

市観光協会と連携して既存観光施設等の充実を図るとともに、見て学び楽しめる地域の歴史・文化の掘り起こし、花畑や写真スポット整備などによる新たな観光資源の発掘・整備及び全国に情報発信できる特産品の開発に向け調査・研究を進める。

## (3) 海津市教育振興基本計画

平成25(2013)年度に策定された海津市教育振興基本計画は教育行政に関して取り組むべき施策を明確にし、推進していくための計画である。

計 画 期 間	————	平成26(2014)～30(2018)年度の5か年
基 本 理 念	┌————	「いのち」をつなぐ教育
	├————	愛情と思いやりに溢れた一人一人の生命がつながり生きる喜びを感じる教育
基本的視点	┌————	『世代をつなぐ』
	├————	『地域をつなぐ』
	└————	『心をつなぐ』



この中で円満寺山古墳群に関連する施策の方針と基本施策を以下にまとめる。

<文化の振興>

○文化の継承と発展

先人が残した貴重な文化遺産を後世に引き継ぐために、保存及び保護、活動支援、調査研究を推進し、歴史的価値を高めるとともに、郷土の文化資源として活用することにより、地域の活性化を図る。

- ・指定文化財の保存・活用、後継者の育成
- ・文化財や伝統芸能の資料収集及び調査研究
- ・歴史文化資源の活用

○豊かな自然と文化財愛護思想の普及啓発

郷土の歴史や文化財に誇りと親しみをもてる普及・啓発活動を推進するとともに、市民自らが行う地域の文化遺産を知り、守り、伝えることによって、郷土に対する愛着や誇りを醸成する。

- ・文化財の情報発信と周知
- ・自然・歴史資源の発見と活用

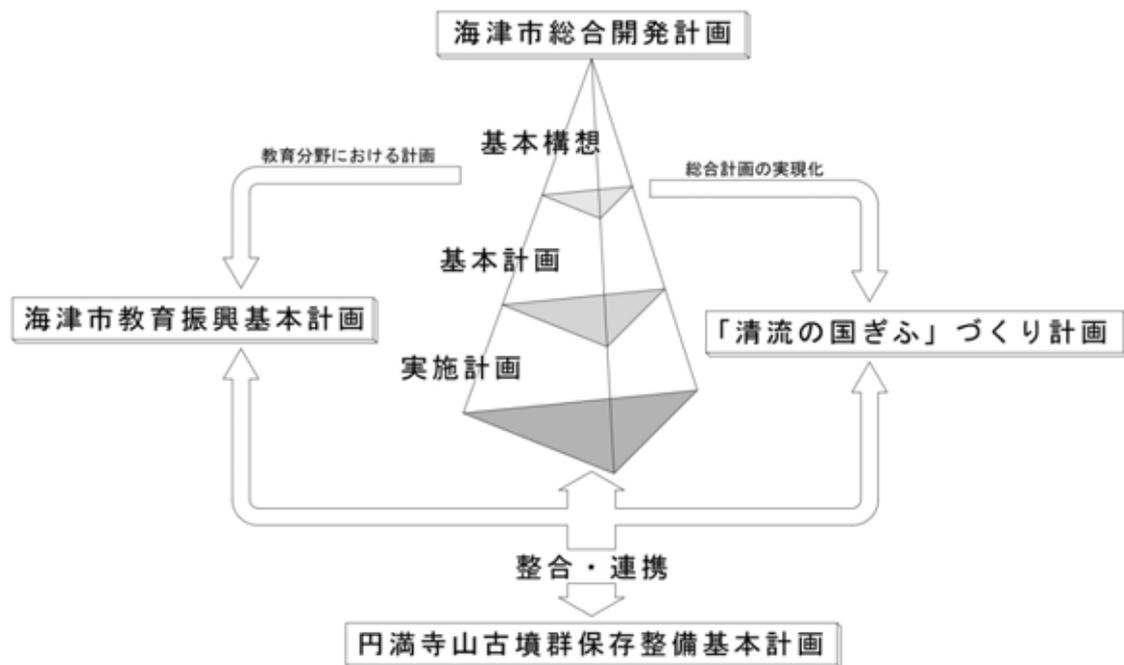


図 2-14 上位関連計画における本計画の位置づけ

## 第3章 円満寺山古墳群と周辺の概要

### 3-1 指定状況

円満寺山古墳群は1号古墳のみ海津市の史跡に指定されている。ただし圓満寺の所有地のみ指定したため、指定範囲は後円部の一部に限定されているが、未指定の2号古墳及び3号古墳を部分的に含んでいる。昭和56(1981)年12月16日に指定された内容は以下の通りである。

- |          |  |
|----------|--|
| 1. 名 称   | 円満寺山古墳   |
| 2. 所 在 地 | 海津市南濃町庭田字東山1164-1  |
| 3. 指定年月日 | (旧南濃町史跡指定) 昭和56(1981)年12月16日   |
| 4. 所 有 者 | 宗教法人 圓満寺   |
| 5. 説 明   | 養老山地の東麓にあたる庭田の聚落を取り囲んで北に延びる支丘上、標高約97mの位置にある。昭和42(1967)年12月に発掘調査され、副葬品が出土、石室(竪穴式石室)は主軸に平行につくられた河原石積みの長さ4.67m、幅0.9mから1.2mである。4世紀中期から後半期に築造されたと考えられ、県下最古の前方後円形の古墳である。 |

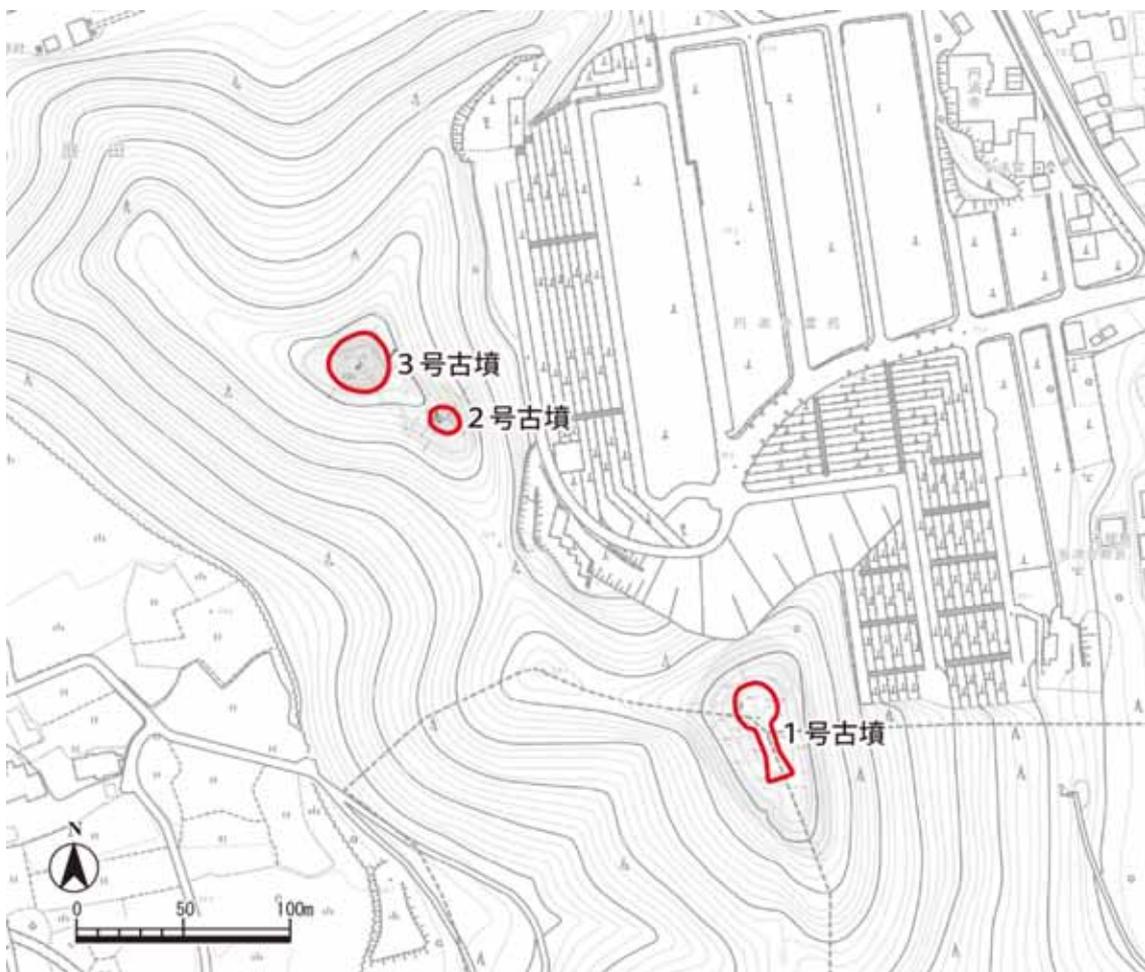


図 3-1 円満寺山古墳群分布図

### 3-2 調査の経過と遺跡の概要

#### (1) 調査経緯と経過

昭和42(1967)年に旧南濃町が大宇庭田字東山(通称円満寺山)の頂上部において、町営広域水道貯水槽の設置工事中、土中から自然石の石積みを確認された。ただちに円満寺から岐阜県教育委員会に対して遺跡発見の届出が行われた。これを受けて岐阜県教育委員会による現地確認が行われたが、墳丘上が貯水槽設置工事の資材置場となっていたことから、発掘調査は工事完了を待つこととした。

円満寺の住職が仏教大学出身であったことから、同学史学科平祐史助教授を通じて、網干善教氏に発掘調査を依頼した。発掘調査体制としては、関西大学文学部考古学研究室が中心となり、仏教大学史学科研究室協力のもと昭和42(1967)年12月9～25日まで行われた。前方後円墳であること、未盗掘の竪穴式石槨からは、いわゆる三角縁神獣鏡2と画文帯神獣鏡1面と鉄製品が出土した。そのうち、三角縁唐草文帯天王日月二神二獣鏡は、当時の全国に分布する古墳からの通算出土枚数は、小林行雄氏が説いていた同范鏡論に再考を促すものであった。また、概報で三角縁波文帯三神三獣鏡と報告された鏡は、今日では三角縁神獣鏡の中でも希少なもので、新たに三角縁波文帯三神二獣博山炉鏡と分類、呼称されることとなったもので、被葬者は大和王権中枢との強い結び付きをもっていた人物を想起させ、全国的に注目されることとなった。

それから42年後、遺跡が持つ価値を向上させるため築造当初の状況や構造規模を把握することを目的とした発掘調査が平成22(2010)～27(2015)年度までの6か年行われた。貯水槽は、上水道の完備によってすでに使用していなかったことから、この調査に合わせて取り壊された。最終年度はその後発見された2～3号古墳を対象とした調査が行われた。1号古墳における年度別発掘調査箇所を以下に示す。

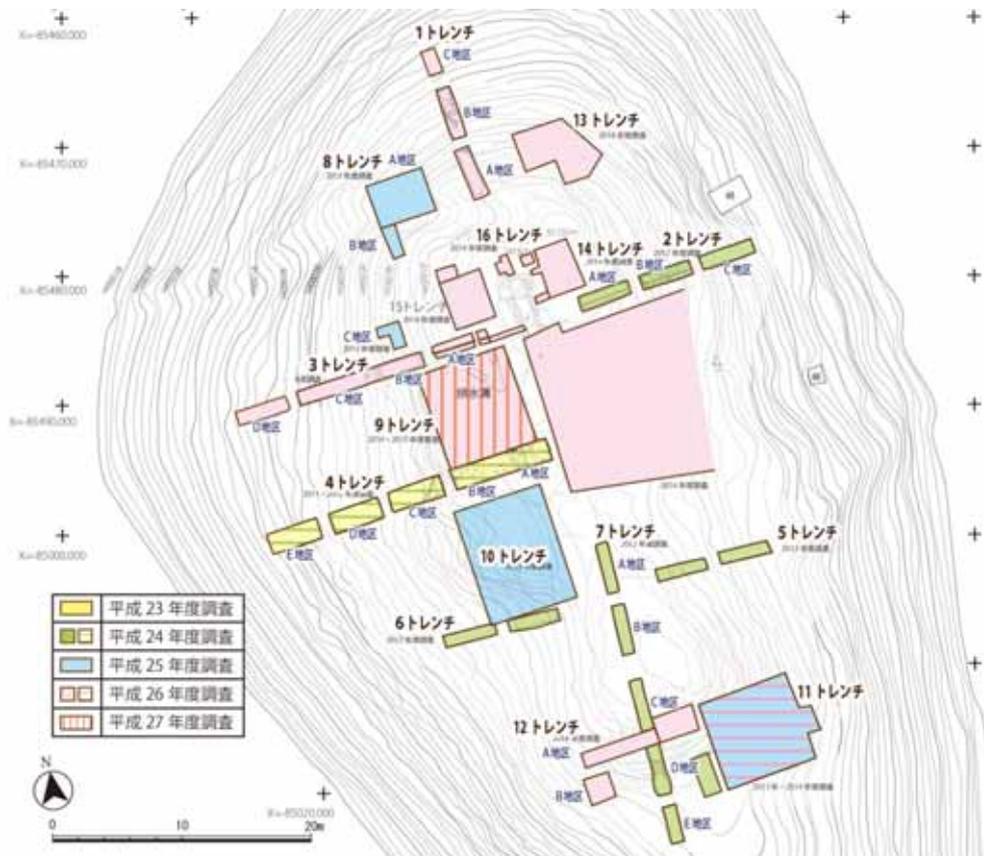


図3-2 発掘調査箇所図(1号古墳)

## (2) 遺跡の概要

### ① 1号古墳

1号古墳は、残存前方部2段、後円部2段築成の前方後円墳である。後円部下段の裾斜面部約1mの範囲、前方部の1段目及び2段目にも葺石を施す。後円部のほぼ中央に竪穴式石槨1基、その西側に隣接して木棺直葬1基を埋葬施設とする。墳丘の全長は53m、後円部長径約26.1m、後円部短径約20.9m、前方部長約26.9m、前方部幅約16.5mである。墳丘端部には基底石列、岩盤の削平及び地山土の叩き締めによって形成した平坦面が明瞭に遺存する。なお、周濠や周堤はない。これまでの調査成果から4世紀後半のものであると考えられる。



写真3-1 1号古墳空撮(平成25年撮影)

### ア) 墳丘

墳丘の構築過程は、後円部と前方部とも地山の岩盤と粘質土を削り出し、墳丘斜面部と墳丘端部に明褐色から赤褐色の土で盛土を行い、下段の上面には還元作用によってにぶい褐色から白灰色を呈する古墳築造時の地表面が残っている。その上に上段部の盛土を行っているが後円部の盛土厚が1mを超えるのに対し、前方部の盛土の厚さは10cm程度と薄い。後円部は周縁部に堤状の盛土を行い中央に向かって盛土を行っている。後円部と前方部の境であるくびれ部は、以前に設けられていた避雷針によって壊されており、構築の順序は不明である。

### ア) 前方部

上端部分は、墳丘基底石が直線的に並び、外側には平坦面がある。墳丘斜面部の葺石は大半が流失している。

11トレンチでは直接的に並ぶ墳丘基底石列を確認し、南東端部と南西端部では平坦面を確認した。



写真 3-2 1号墳完掘全景(南から)

b) 後円部

墳丘は2段築成である。北側と南西側の遺存状況から、古墳築造当初は墳丘端部に基底石が円弧状に並べられ、墳丘の斜面部には葺石があった。墳丘の東側は墳丘端部の基底石列と外側に平坦面を確認したが、大半の葺石と墳丘盛土は流失していた。平坦面は約40～60cmの幅で、墳丘南西側では岩盤を削っていたのに対し、東側は盛土で固く叩き締められていた。主なトレンチ調査で得られた成果を以下にまとめる。

8トレンチA区では、墳丘基底である平坦面と墳丘端部を検出した。墳丘端部の裾石は、人頭大の石材、裾石より上方は握り拳大程度の石材を用いている。B区で断ち割り状に発掘して断面土層を観察したところ、築造当初の墳丘盛土が良好に遺存し、墳丘周縁に盛られた「土手状盛土」、または「堤状の盛土単位」を検出した。この盛土工法は、「西日本的」と呼ばれる前方後円墳にみられ、前方後方墳には用いられていないものである。墳丘基底石の石材は地山由来のチャートで占められ、地山を削平した基底面は約0.8～1mの幅で一部が傾斜しているものの概ね平坦であった。

9トレンチでは帯状に遺存している墳丘基底石を検出した。トレンチ北側で検出した暗渠状の列石は木棺直葬の墓壇に接続する暗渠排水溝である。墳丘基底石及び基底面は、8トレンチと変わらないが、暗渠排水溝の石材は長軸20cm前後の河原石を用いている。

13トレンチでも円弧を描く墳丘基底石列と地山を叩き締めた平坦面が遺存しており、墳丘裾部から傾斜交換点まで石が巡っていた。



写真 3-3 9トレンチ 後円部南西の葺石(南より)



写真 3-4 9トレンチ 排水溝(西より)



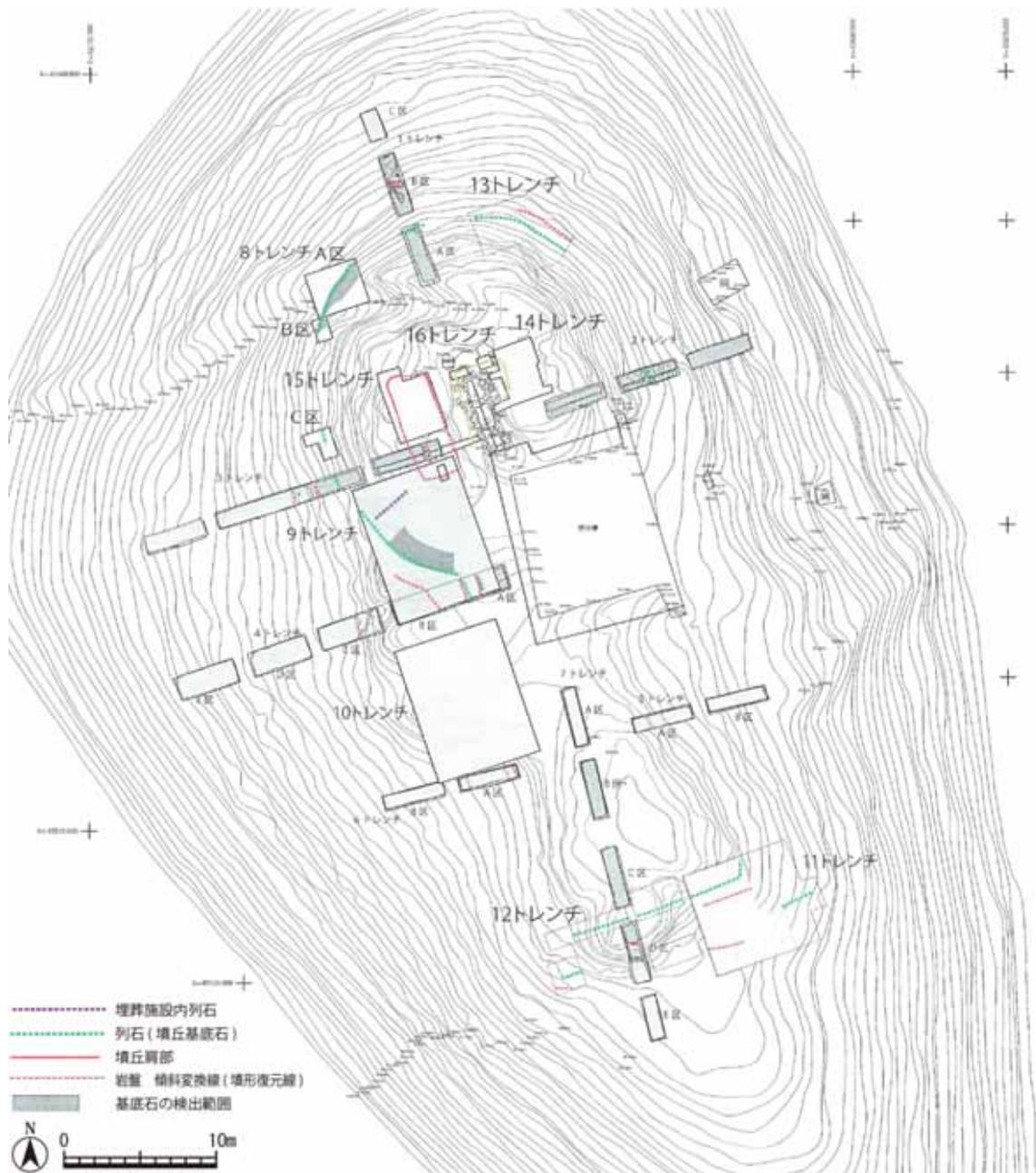


図 3-6 1号古墳 トレンチ及び検出遺構配置図

#### イ) 埋葬施設

先に竪穴式石槨を設け、石槨を閉塞し封土を盛って、第1次完成としてから、西側部分の封土を掘り込んで木棺直葬の墓壇と暗渠状の排水溝を設けて第2次の完成としている。この際には、排水溝を設けるために葺石は外し、改めての葺き直しはされていない。加えて、木棺の閉塞時には段築の段を埋めて不整形な形で完成させている。両埋葬施設ともに、現状の表土層と巨礫を多く含む硬く締まった第2層下で墓壇を見出せ、古墳築造時の旧地表面を切る形で地山面まで掘り下げてから埋葬施設の底面を構築している。

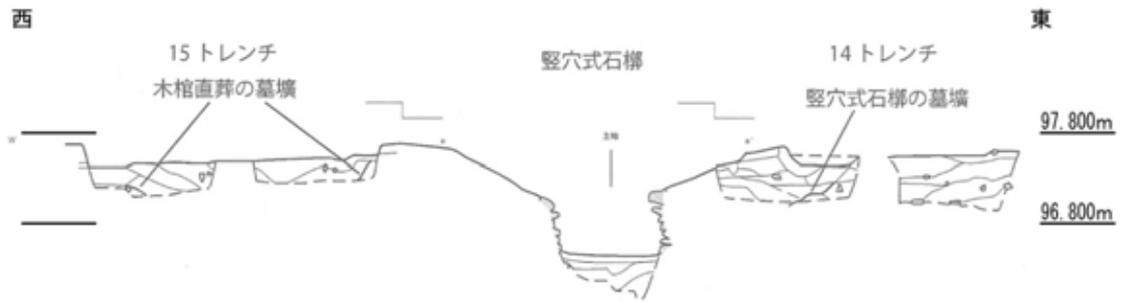


図 3-7 後円部東西横断面



写真 3-5 後円部完掘全景(南より)

a) 石槨(第1埋葬施設)

古墳の主体部は後円部中心よりやや前方部寄りに位置し、河原石を積んだ竪穴式石槨を設け、内部に木棺を収めていた。

石槨の規模は、全長(南北)4.67m、幅(東西)0.9~1.2m、高さは天井及び側壁上部が崩れていたことから残存状態のよいところで1.2mである。南壁の約3分の2は貯水槽設置にともない失われた。養老山地が源流の河川に多く見られる硬質砂岩の河原石が使われていることから、近辺から集められたものと考えられる。石槨内部から粘土は確認されず、床面に木棺の腐朽片が広範囲に散在していた。

岩盤の壙床に地山穿鑿時に生じた、拳よりやや小さい角礫を厚さ10cmに一様に敷き詰め、さらにこの上に赤色微粒子土を約5cm敷き、これを叩き締めて棺床としている。平面形の特徴として、南側の幅が約90cmに対して北側は120cmと30cmも異なる点が挙げられる。

各側壁の接合面は下の部分ではほぼ直角に組まれているが、上部ではドーム形式に近く、四隅の側壁の接点に石を挟み込んで丸みを帯びている。基底石より5~6段位までほぼ垂直に組まれ、徐々に

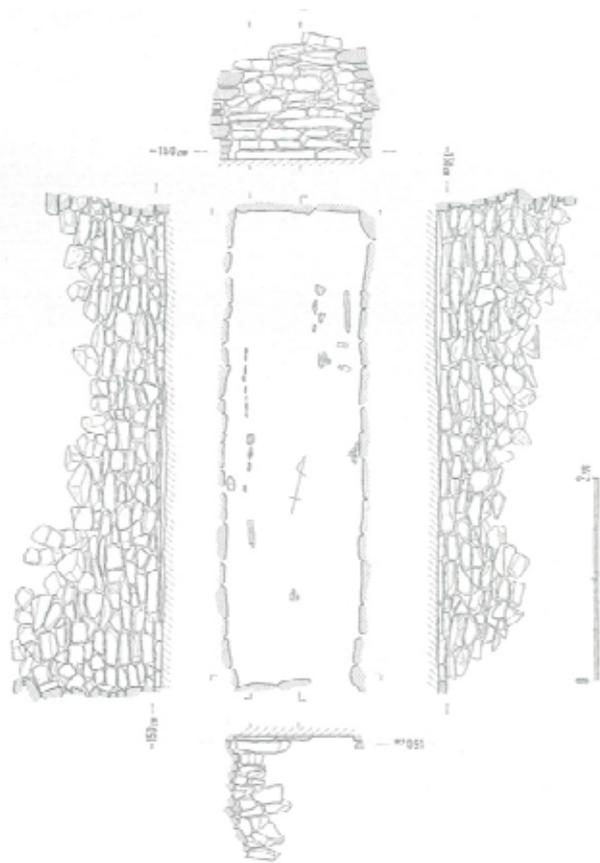


図 3-8 石室実測図

石室内へ持ち送られながら、天井部付近に至っては、東西側壁はプランより約25cm前後石室内へせり入っている。天井部付近の東西側壁の幅は底面の幅より約50cm前後狭くなり、石槨の幅は60～80cmとなる。

木棺の形式については、棺床が粘土床ではなく、そのうえ石室上部の落ち込みが著しかったので、詳しくはわからない。ただ床面で確認された広範囲に棺材の細片が残存していたことから木棺施設の規模は、長さ3.2m以上、幅75cm程度のもので推定される。

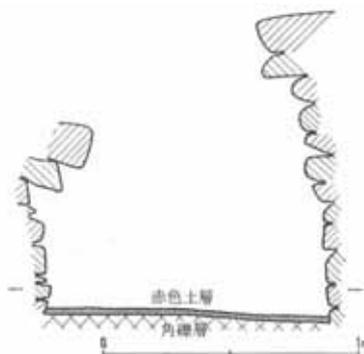


図 3-9 石槨横断面図

#### b) 木棺直葬(第2埋葬施設)

木棺直葬の墓壇は、長軸約7.2m、短軸約2.6mを測り、北西角がやや突出した平面長方形を呈する。規模は竪穴式石槨とほぼ同じといえる。遺存する木質からコウヤマキを材とした割竹形木棺である。後円部西側では、竪穴式石槨の覆土層の立ち上がりは見出せず、木棺直葬の墓壇の覆土が覆うことから、木棺直葬が竪穴式石槨に後続する。木棺直葬墓壇の西側、北側、東側の肩部で、土師器の細片が出土したことから、墓壇の周囲に土器が並べてあった可能性もある。

#### ウ) 副葬遺物

1号古墳の竪穴式石槨から出土した遺物は次のとおり。これらの遺物は現在、岐阜県博物館が所蔵し、一部は展示されている。

鏡	各 1 面	剣	2 口
三角縁波文帯三神二獣博山炉鏡	1 面	槍	1 口
三角縁唐草文帯天王日月二神二獣鏡	1 面	鉄鏃	5 本
画文帯神獣鏡	1 面	不明尖頭鉄器	1 本
直刀	3 口	鉄斧	2 口

#### 鑑鏡 1 三角縁波文帯三神二獣博山炉鏡

石室中央部よりやや北寄りの地点で出土した三角縁神獣鏡は径21.4cm、波文帯三神三獣鏡の形式で、文様はかなり鮮明であるが、錆は著しい。中央に径3.4cmの円鈕を有し、この鈕の周囲に鋸歯文がめぐる。内区には扨形座のある乳を6個おき、その各々の間に三神二獣と博山炉(香炉)をもつ亀を配する。

#### 鑑鏡 2 三角縁唐草文帯天王日月二神二獣鏡

石室の西北隅に鏡背を上にして置いた状態で出土したこの鏡は、直径21.7cm、文様が非常に鮮明な鑄上りのよい鏡で、鏡面に織物の錆着がみられる。円形の鈕をめぐって鈕座があり、内区には扨文乳座をもつ4乳が正確に配置されている。この乳の各々の間に単像、周列に二神二獣が配置されている。

### 鑑鏡 3 画文帯神獸鏡

石室の西壁中央やや南寄りの位置で、壁に立てかけるような状態で検出した鏡は、直径14.8cmの画文帯神獸鏡である。中央にやや扁平な径2.89cmの鈕があり、これをめぐって内区には4乳が配置され、その間に神像を置く。

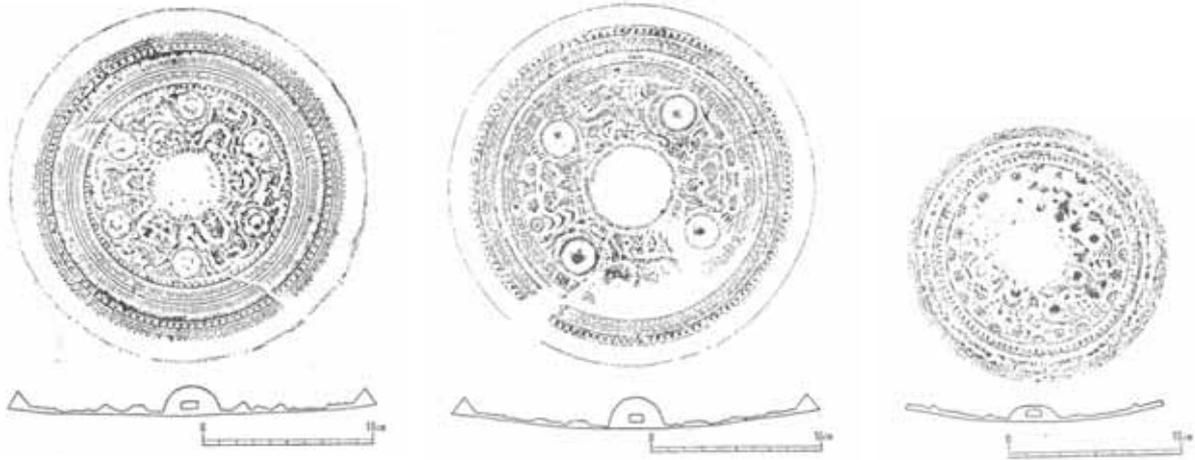


図 3-10 波文帯三神二獸博山炉鏡

図 3-11 唐草文帯天王日月二神二獸

図 3-12 画文帯神獸鏡

この他にも刀剣、槍、鉄鏃や不明尖頭鉄器、鉄斧が出土しているが、説明は省略し実測図のみ掲載する。

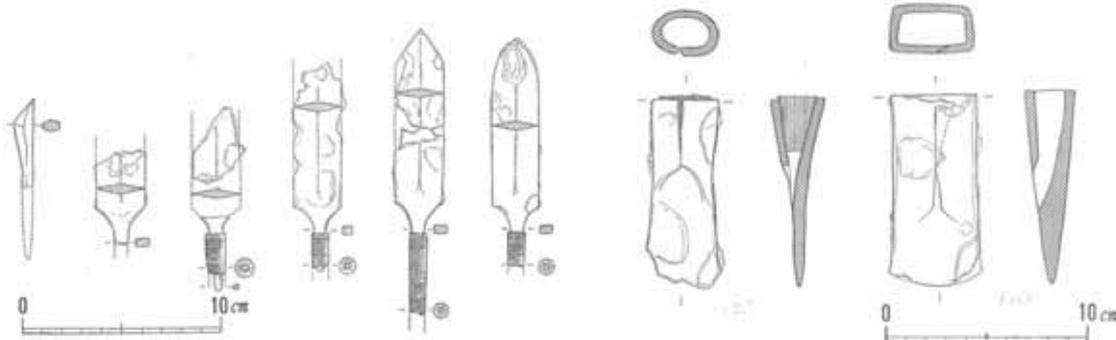


図 3-13 鉄鏃及び尖頭器実測図

図 3-14 鉄斧実測図

木棺直葬からは槍と不明鉄製品が出土した。

### ② 2号古墳

2号古墳は、長軸(南北)が約15m、短軸(東西)が推定約12mの南北に長い円墳である。墳丘盛土の端からの墳丘の残存高は、北側約0.9m、南側約1.3m、西側約2mである。

21・23・24～26トレンチで墳丘盛土の端を検出した。27トレンチで墳丘盛土が検出されなかったのは、祠への参道によって削られたと考えられる。墳丘構造は1号古墳と同様に外周に堤状の丘を造ってから内側に盛土を行っている。21トレンチの東端では盛土の上面に拳大の角礫を検出し、24トレンチでは墳丘盛土の端部に人頭大の角礫を検出した。これらは1号古墳でもみられた葺石と墳丘基底石であると考えられる。24～26トレンチにて盛土端部の外側に水平な平坦面を造っていることが認められた。

21・23トレンチにて墳丘盛土の端に隣接した深さ約0.2mの溝1条を確認した。この溝は、尾根筋に直交し、古墳北側で途切れている。墳丘の裾に沿った溝は、他トレンチでは確認できず、3号古墳からも離れていることから、2号古墳にともなう区画溝であると考えられる。

墳丘の中央にて埋葬施設を検出した。墓壙の規模は、長さ約4.3m、幅約2.4mである。内側には一段下がる範囲があり、木棺が腐って覆土が陥没したものと考えられる。そのため、素掘りの墓壙に棺を安置した木棺直葬と考えられ、その規模は長さ2.1m、幅0.95mである。各調査区から遺物は出土していない。



写真3-6 23トレンチ(北西より)



写真3-7 23トレンチ 完掘全景(北西より)

### ③ 3号古墳

3号古墳は岩盤の上に盛土をして墳丘を造っている。35トレンチでは、墳丘の斜面に拳大の角礫を葺いている。盛土の端を墳丘の裾と考ええると、墳丘規模は直径約30mとなるが、現地形ではその外側に傾斜が緩やかな範囲が認められることから、岩盤を削り出して、古墳の規模をより大きくみせようとした可能性がある。いずれにしても市域最大級の円墳である。また、3号古墳の盛土端部から空閑地を空けて2号古墳が区画溝を設けていることから、3号古墳の裾は盛土の範囲より広がったことがうかがえ、2号古墳の方が後に築かれたと考えられる。墳丘盛土の端からの墳丘の残存高は約3.5mである。

古墳の中央に、平面と断面で直線的に並んだ拳大の礫と、その内側で土が陥没している状況の埋葬施設を検出した。これは木棺の周囲に壁状に多数の礫を巡らせた礫槨と呼ばれる埋葬形式であり、連なる礫の内側の一段下がる範囲は、木棺が安置された跡と考えられる。また、礫槨の東側で特に精良な土が堆積する範囲もみつき、墓壙かもしれないその範囲内では土器の細片がわずかにみられる。各調査区から遺物は出土していない。



写真3-8 35トレンチ 葺石(南西より)



写真3-9 33トレンチ 礫槨(北東より)

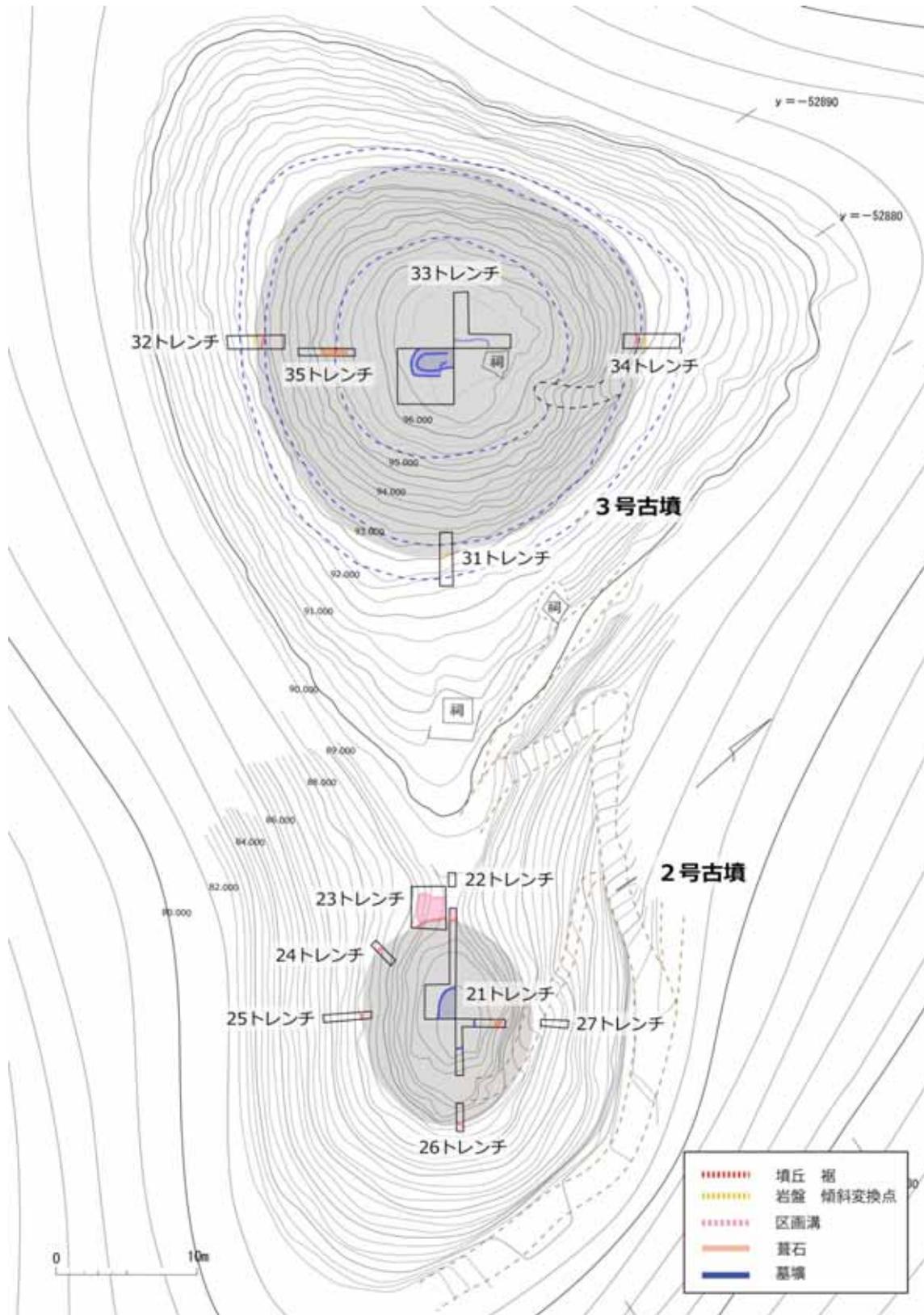


図 3-15 2号・3号古墳 トレンチ及び検出遺構配置図

### 3-3 遺跡及び周辺の概要

#### (1) 自然条件

##### ①地形

円満寺山古墳群は、養老山地から北東に延びる尾根の稜線上に位置する。尾根の北東側は圓満寺の後背地に位置し、霊苑を設けるため古墳の近くまで大きく切り込まれている。1号古墳は霊苑南側の標高90m付近にあり、その北西にある3号古墳は1号古墳とほぼ同じ高さで、2号古墳が若干低い位置にある。いずれの古墳も傾斜が急な山頂部及び周辺に位置し、平坦部を広く設けることが難しい場所にある。

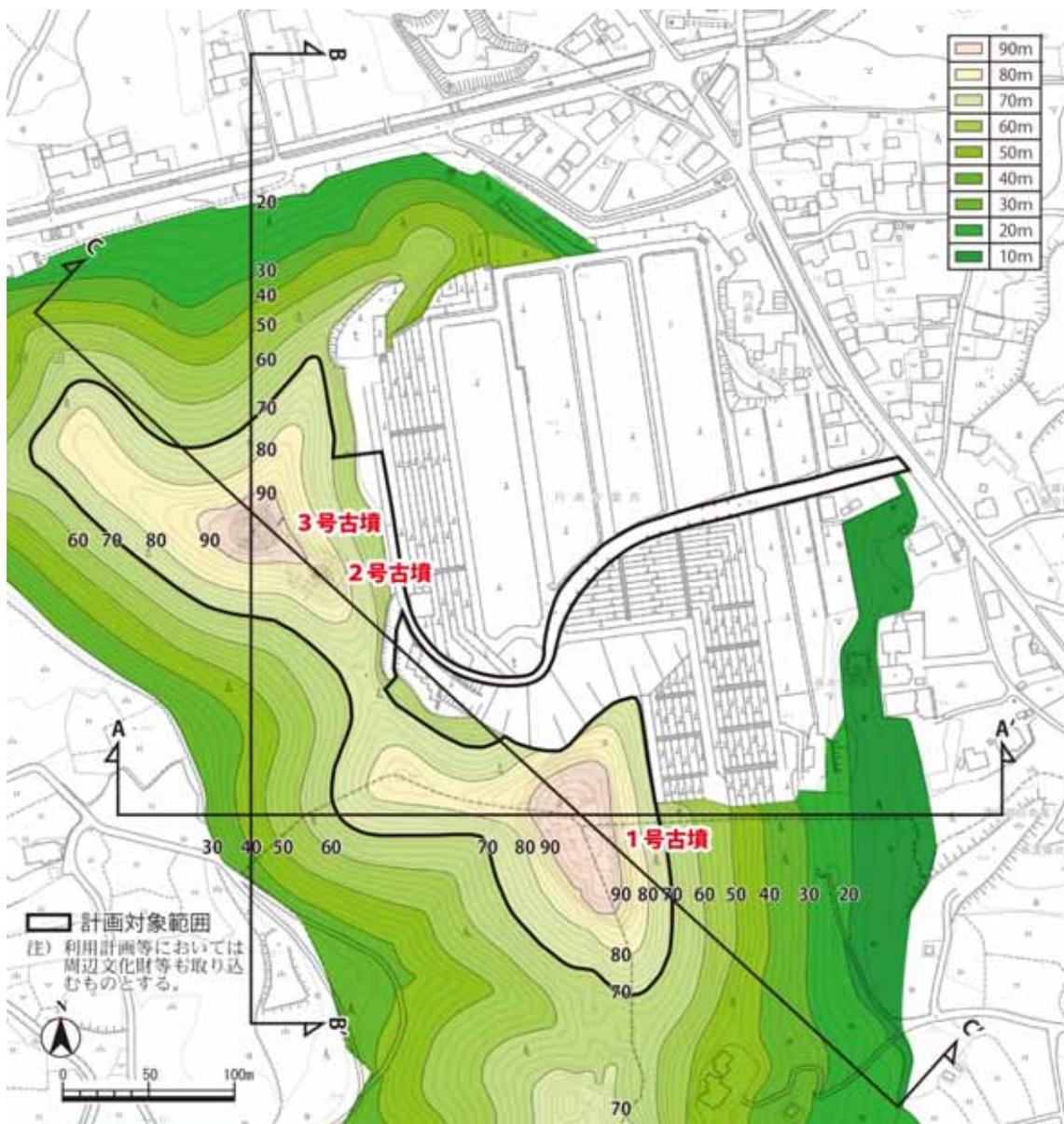


図 3-16 地形図



写真 3-10 航空写真(縦横比 3 : 1)

出典 Google マップより一部加工

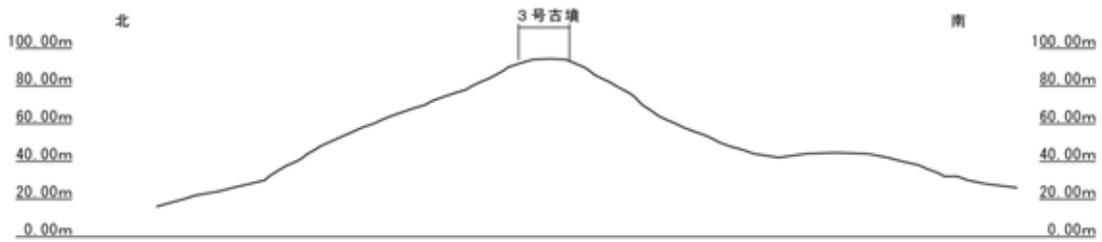


図 3-17 A-A'断面図

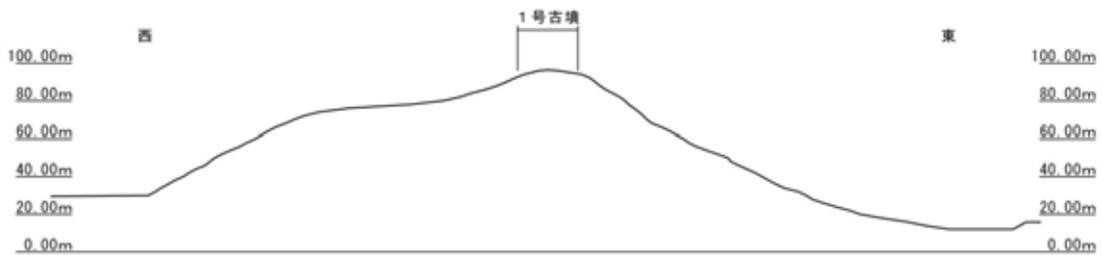


図 3-18 B-B'断面図

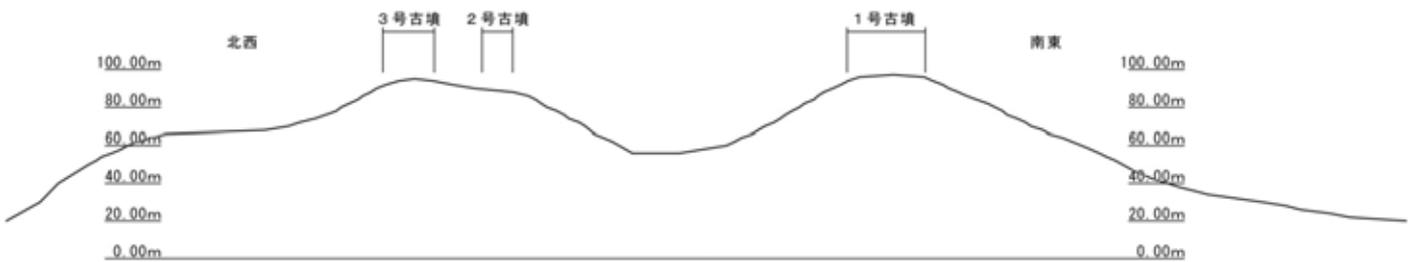


図 3-19 C-C'断面図

## ②植生

円満寺山古墳群周辺の植生は、モチツツジ・アカマツ群集とスギ・ヒノキ・サワラ等の植林で形成されている。なお、1～3号古墳とも墳丘上部の樹木は発掘調査にともない概ね伐採されている。

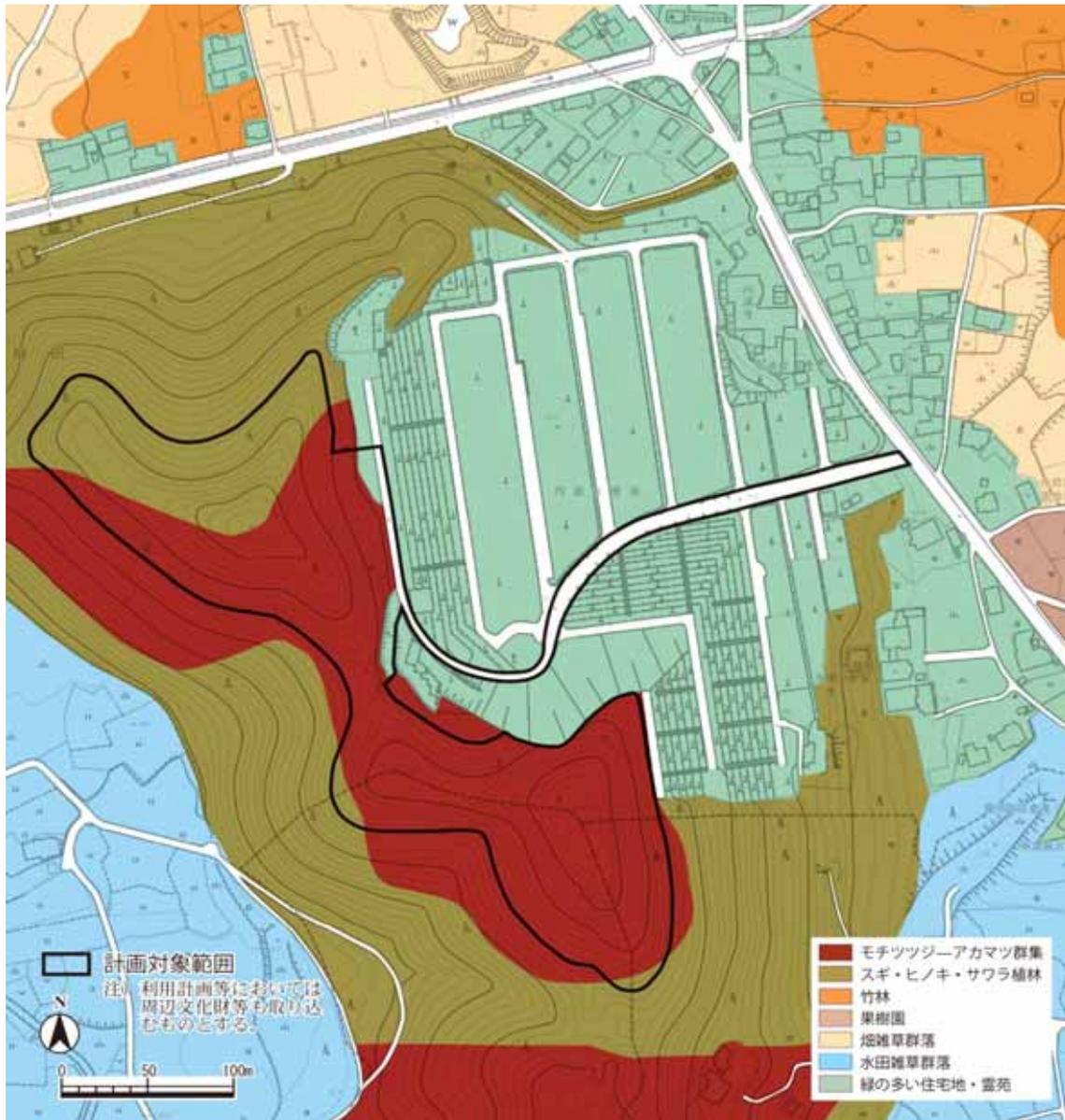


図 3-20 植生図

参考資料 環境省自然環境局生物多様性センター(駒野)より

### ③ 景観

濃尾平野に向かって延びた尾根の稜線上にあることから、1号古墳及び3号古墳からの眺望は非常に優れている。ただし、現在は墳丘周辺の樹木が密に生長していることから、合間からわずかに見える程度となっている。



写真3-11 1号古墳北側は広く開けている



写真3-12 1号古墳東側は樹木により見通しがきかない



写真3-13 2号古墳から1号古墳の見通しもきかない



写真3-14 3号古墳北側も樹木が多い



写真3-15 北東方向からの古墳群全体

(2) 社会条件

①土地所有と地目

円満寺山古墳群が位置する土地は、全て民有地(圓滿寺所有含む)で8筆からなる。活用上必要な施設整備を考慮するとその数は増えることが予想される。なお、地目は山林と墓地からなる。

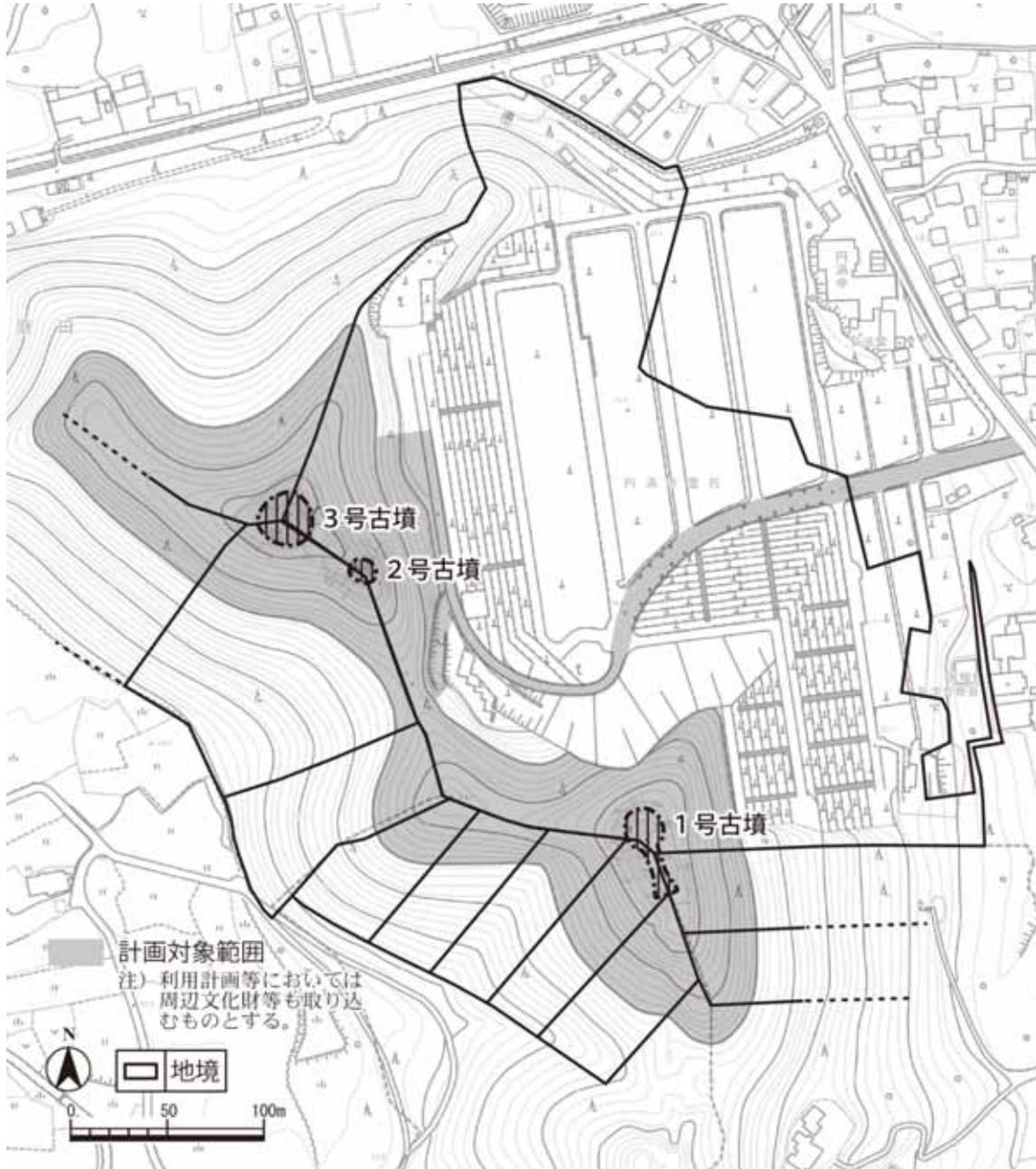


図 3-21 土地境界図

## ②土地利用と整備状況

現在は、圓滿寺が整備してきた霊苑最上段からの登山口が、ほぼ唯一の入り口である。自然岩盤を開削しスロープ状に均した登山道で、古墳見学者を気遣い階段が設けられ、山中の随所にある祠への参詣道に合流していた。一連の発掘調査では、圓滿寺にご協力いただき、この登山道と参詣道を重機で拡幅し、墳丘に悪影響を与えないよう迂回して各古墳へ着くように設けた。しかし、開削した自然岩盤は元来、短時間で風化、剥離する性質があり、調査期間中を通じて大雨の度に、転圧していた登山道が流出する事態が生じている。各古墳の発掘調査区、墳丘の流失部や土砂流出が著しい箇所には植生土嚢による養生を施しているが、仮設的なものであり、植栽等による墳丘、園路、登山道の土砂流出防止措置と、墳丘上の樹木等の伐採等の管理が必要である。また、登山口に設置してあった遺跡の解説板は、損傷により一時撤去している。1号古墳の石槨は養生のため内側には土嚢を充填し、天井に棧を通してコンパネと耐光シートで被覆養生している。貯水槽を撤去した後の墳丘壁面は客土による法面を造成して養生している。

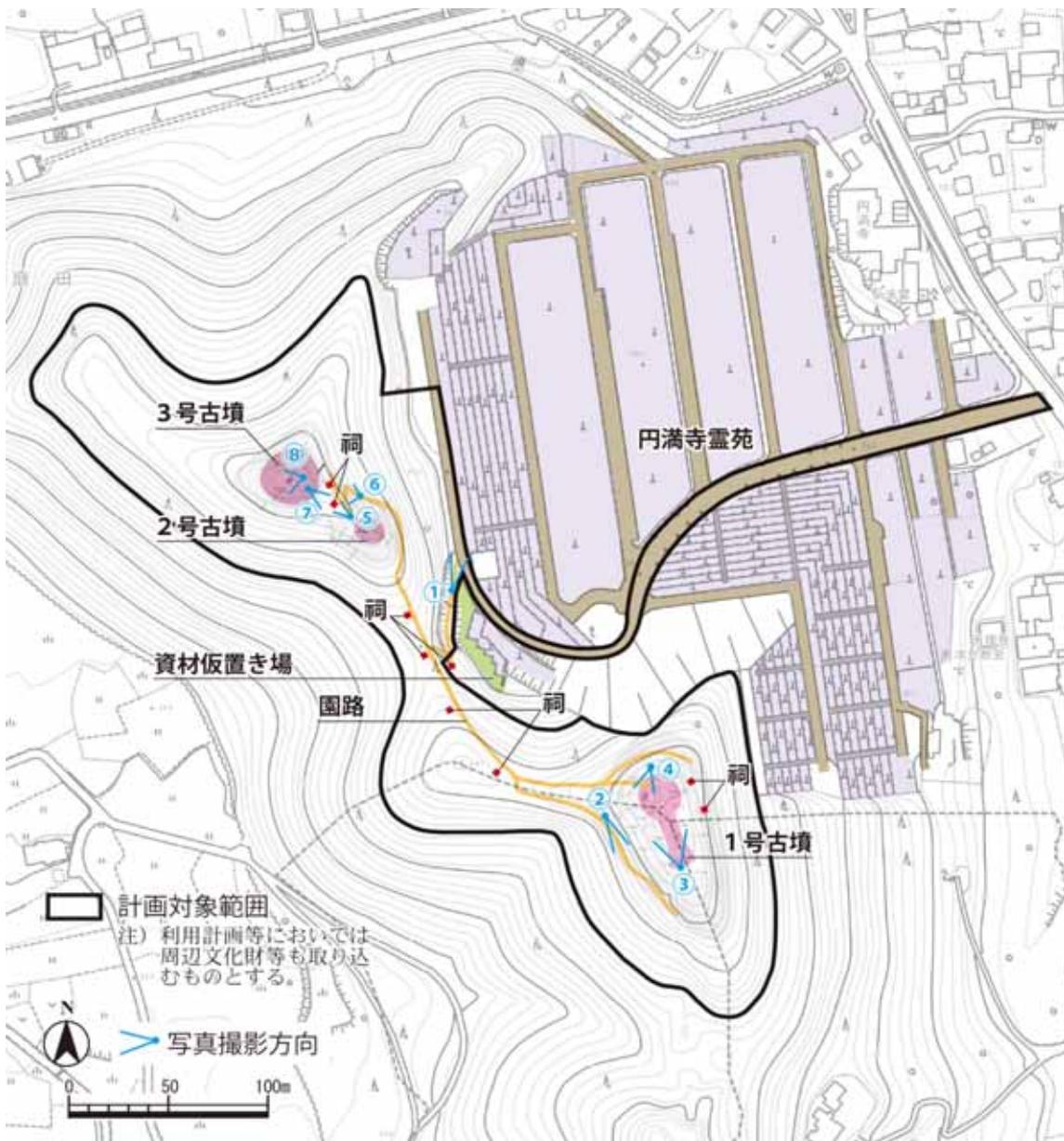


図 3-22 現況平面図



写真3-16 ①通路入口



写真3-17 ②仮設通路(1号古墳西側)



写真3-18 ③樹木伐採による裸地化(1号古墳前方より)



写真3-19 ④発掘調査箇所埋め戻し(1号古墳)



写真3-20 ⑤祠(2・3号古墳中間地点)



写真3-21 ⑥仮設通路(3号古墳北側)



写真3-22 ⑦墳丘周辺の樹木伐採(3号古墳より)



写真3-23 ⑧樹木伐採後切株から生える蘗(3号古墳)

※写真 No. は P38 現況平面図の写真撮影方向と対応

### ③法的規制

円満寺山古墳群は、国土利用計画法に基づく都市地域及び地域森林計画対象民有林に指定されている。また、都市計画法に基づく都市計画区域に指定されている（法規制図1）。

2号・3号古墳側の東側を除く斜面地は、土砂災害防止法に基づく土砂災害警戒区域（イエローゾーン）及び土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）に指定されている。さらに北側斜面地は急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律に基づき急傾斜地崩壊危険箇所となっている（法規制図2）。

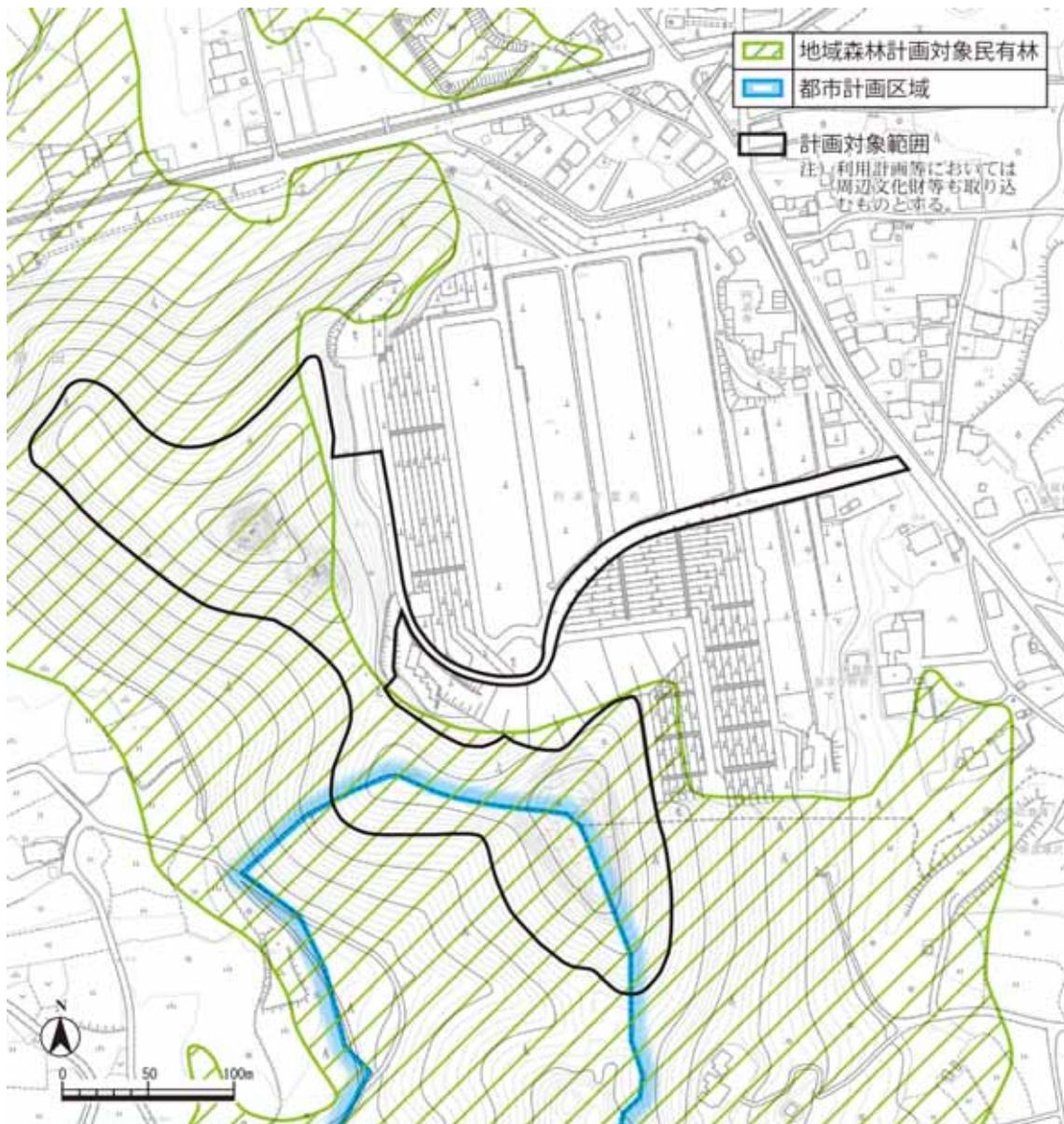


図 3-23 法規制図 1

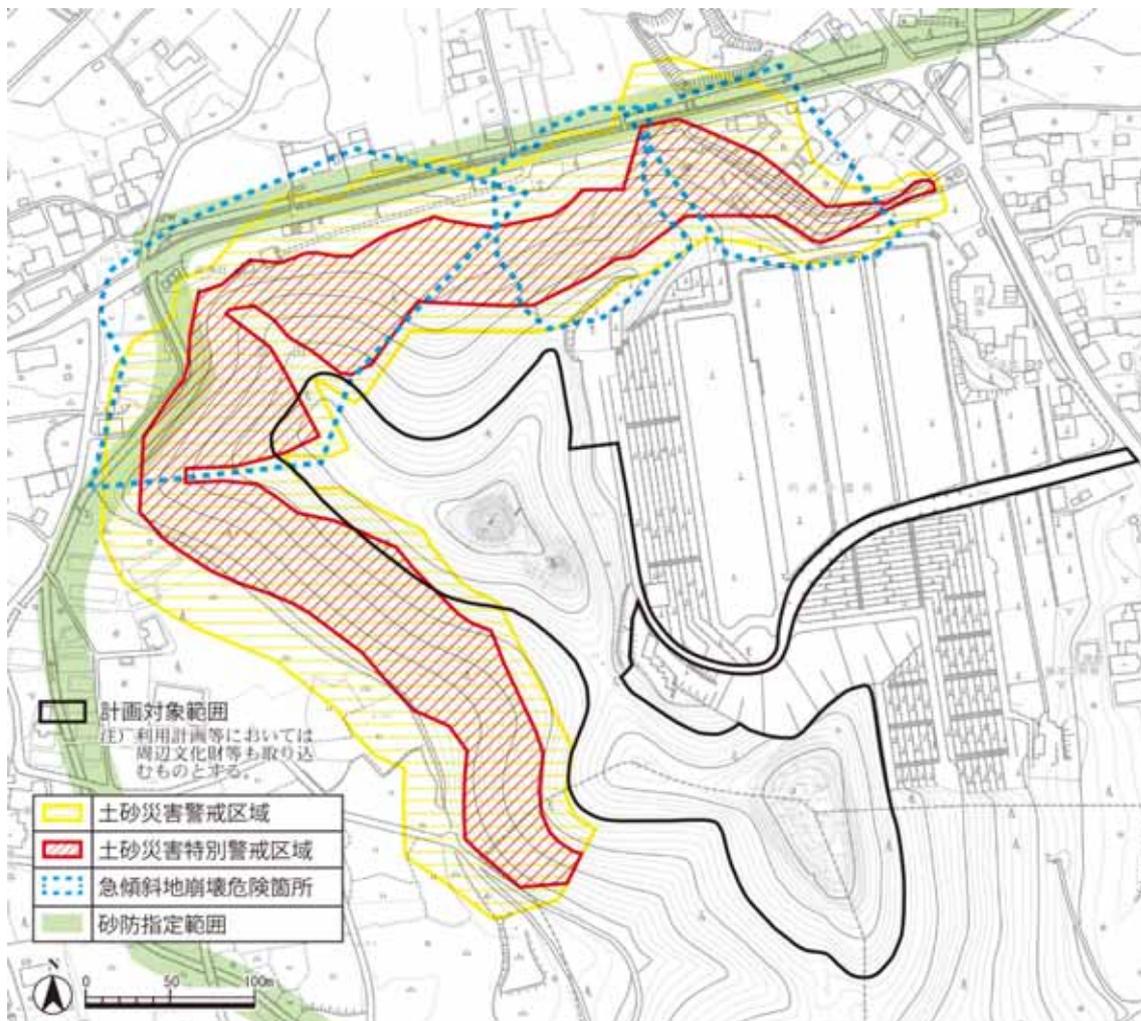


図 3-24 法規制図 2

#### ④ 周辺関連資源

円満寺山古墳群がある尾根の東側には、駒野駅を中心に東西南北ともに約15kmの羽根谷扇状地がある。この扇状地には県指定史跡の庭田貝塚と羽沢貝塚の2つの貝塚があり、海岸線のない県内において本市のみに見ることができる。また、本市における最も古い遺跡でもある。

円満寺山古墳群と同時代のものとしては、すぐ南側に諏訪神社裏山古墳1号及び2号がある。さらに東側約500m付近にある洪積台地には大正時代まで城山古墳があった。小学校建設にともない消滅したが、出土した仿製獣形鏡や銅鈴、須恵器等の遺物は海津市教育委員会で保管し、一部を海津市歴史民俗資料館で常設展示している。この他に中近世遺構として、かつて城山古墳があった位置に駒野城跡や駒野館跡、徳田谷には養老山地採石場跡と、さらに谷を隔てた北には、戸田遺跡があり、縄文—弥生—古墳—古代—中世と連綿と続く遺跡の密集地域である。また北に約3.7kmの地点には、天然記念物津屋川水系清水池ハリヨ生息地や津屋川沿いのヒガン花の群生が人々に親しまれている。なお、かつての圓満寺跡は北西約600m付近にある。